

蒲团

田山花袋

小石川の切支丹坂から極楽水ごくらくすいに出る道のだらだら坂を下りようとして渠かは考えた。「これで自分と彼女との関係は一段落を告げた。三十六にもなつて、子供も三人あつて、あんなことを考えたかと思うと、馬鹿々々しくなる。けれど……けれど……本当にこれが事実だろうか。あれだけの愛情を自身に注いだのは単に愛情としてのみで、恋ではなかつたらうか」

数多い感情ずくめの手紙——二人の関係はどうしても尋常ではなかつた。妻があり、子があり、世間があり、師弟の関係があればこそ敢てあえ烈しい恋に落ちなかつたが、語り合ふ胸の轟とん、相見る眼の光、その底には確かに凄じすひい暴風あらしが潜んでいたのである。機会たまに遭遇であしさえすれば、その底の底の暴風は忽ち勢を得て、妻子も世間も道德も師弟の関係も一挙にして破れて了しまうであらうと思われた。少くとも男はそう信じていた。それであるのに、二三日來のこの出来事、これから考えると、女は確かにその感情を偽り売つたのだ。自分を欺いたのだと男は幾度も思つた。けれど文学者だけに、この男は自ら自分の心理を客観するだけの余裕を有もつていた。年若い女の心理は容易に判断し得られるものではない、かの温あたたかい嬉しい愛情は、単に女性特有の自然の発展で、美しく見えた眼の表情も、やさしく感じられた態度も都すべて無意識で、無意味で、自然の花が見る人に一種の慰藉なぐさみを与えたやうなものかも知れない。一步を譲つて女は自分を愛して恋していいたとしても、自分は師、かの女は門弟、自分は妻あり子ある身、かの女は妙齡の美しい花、そこに互に意識の加

わるのを如何ともすることは出来まい。いや、更に一步を進めて、あの熱烈なる一封の手紙、陰に陽にその胸の悶を訴えて、丁度自然の力がこの身を圧迫するかのようになり、最後の情を伝えて来た時、その謎をこの身が解いて遣らなかつた。女性のつつましやかな性として、その上に猶露わに迫って来る事がどうして出来よう。そういう心理からかの女は失望して、今回のような事を起したのかも知れぬ。

「とにかく時機は過ぎ去った。かの女は既に他人の所有だ！」

歩きながら渠はこう絶叫して頭髪をおしつた。

縞セルの背広に、麦稈帽、藤蔓の杖をついて、やや前のめりにだらだらと坂を下りて行く。時は九月の中旬、残暑はまだ堪え難く暑いが、空には既に清涼の秋気が充ち渡って、深い碧の色が際立って人の感情を動かした。肴屋、酒屋、雑貨店、その向うに寺の門やら裏店の長屋やらが連つて、久堅町の低い地には数多の工場の煙筒が黒い煙を漲らしていた。

その数多い工場の一つ、西洋風の二階の一室、それが渠の毎日正午から通う処で、十畳敷ほどの広さの室で中央には、大きい一脚の卓が据えてあつて、傍に高い西洋風の本箱、この中には総て種々の地理書が一杯入れられてある。渠はある書籍会社の囑託を受けて地理書の編輯の手伝に従っているのである。文学者に地理書の編輯！ 渠は自分が地理の趣味を有っているからと称して進んでこれに従事しているが、内心これに甘じておらぬことは言うまでもない。後れ勝なる文学上の閱歴、断篇のみを作つて未だに全力の試みをする機会に遭遇せぬ

煩悶、青年雑誌から月毎に受ける罵評の苦痛、渠自らは
その他日成すあるべきを意識してはいるものの、中心こ
れを苦に病まぬ訳には行かなかつた。社会は日増に進歩
する。電車は東京市の交通を一変させた。女学生は勢力
になって、もう自分が恋をした頃のような旧式の娘は見
たくも見られなくなった。青年はまた青年で、恋を説く
にも、文学を談ずるにも、政治を語るにも、その態度が
総て一変して、自分等とは永久に相触れることが出来な
いように感じられた。

で、毎日機械のように同じ道を通って、同じ大きい門
を入って、輪転機関の屋を撼す音と職工の臭い汗との交
つた細い間を通って、事務室の人々に軽く挨拶して、こ
つこつと長い狭い階段を登って、さてその室に入るのだ
が、東と南に明いたこの室は、午後の烈しい日影を受け
て、実に堪え難く暑い。それに小僧が無精で掃除をせぬ
ので、卓の上には白い埃がざらざらと心地悪い。渠は椅
子に腰を掛けて、煙草を一服吸って、立上って、厚い統
計書と地図と案内記と地理書とを本箱から出して、さて
静かに昨日の続きの筆を執り始めた。けれど二三日来、
頭脳がおしやくしゃしているので、筆が容易に進まない。
一行書いては筆を留めてその事を思う。また一行書く、
また留める、又書いてはまた留めるという風。そしてそ
の間に頭脳に浮んで来る考は総て断片的で、猛烈で、急
激で、絶望的の分子が多い。ふとどうという聯想か、ハウ
プトマンの「寂しき人々」を思い出した。こうならぬ前
に、この戯曲をか女の女の日課として教えて遣ろうかと思
つたことがあつた。ヨハンネス・フォケラートの心事と
悲哀とを教えて遣りたかつた。この戯曲を渠が読んだの

は今から三年以前、まだかの女のこの世にあることをも夢にも知らなかった頃であったが、その頃から渠は淋しい人であった。敢てヨハンネスにその身を比そうとは為なかつたが、アンナのような女がもしあったなら、そういう悲劇に陥るのは当然だとしみじみ同情した。今はそのヨハンネスにさえなれぬ身だと思つて長嘆した。

さすがに「寂しき人々」をかの女に教えなかつたが、ツルゲネーフの「ファースト」という短篇を教えたことがあった。洋燈の光明かなる四畳半の書齋、かの女の若々しい心は色彩ある恋物語に憧れ渡つて、表情ある眼は更に深い深い意味を以て輝きわたつた。ハイカラな庇髪、櫛、リボン、洋燈の光線がその半身を照して、一卷の書籍に顔を近く寄せると、言うに言われぬ香水のかおり、肉のかおり、女のかおり——書中の主人公が昔の恋人に「ファースト」を読んで聞かせる段を講釈する時には男の声も烈しく戦えた。

「けれど、もう駄目だ！」
と、渠は再び頭髪をおしつた。

二

渠は名を竹中時雄と謂つた。

今より三年前、三人目の子が細君の腹に出来て、新婚の快樂などはとうに覚め尽した頃であった。世の中の忙しい事業も意味がなく、一生作に力を尽す勇氣もなく、日常の生活——朝起きて、出勤して、午後四時に帰つて来て、同じように細君の顔を見て、飯を食つて眠るといふ単調なる生活につくづく倦き果てて了つた。家を引越

歩いてても面白くない、友人と語り合っても面白くない、外国小説を読み渉獵あさっても満足が出来ぬ。いや、庭樹にわぎの繁しげり、雨の点滴てんてき、花の開落などいう自然の状態さえ、平凡なる生活をして更に平凡ならしめるような気がして、身を置くに処は無いほど淋しかった。道を歩いて常に見る若い美しい女、出来るならば新しい恋を為たいと痛切に思った。

三十四五、実際この頃には誰にでもある煩悶はんもんで、この年頃に賤いやしい女に戯るるもの多いのも、畢竟ひつきようその淋しさを医いす為めである。世間に妻を離縁するものもこの年頃に多い。

出勤する途上に、毎朝邂逅であう美しい女教師があった。渠はその頃この女に逢あうのをその日その日の唯一の楽しみとして、その女に就あいていろいろな空想たくましゆを逞たくまうした。恋が成立って、神楽坂かぐらざかあたりの小待合に連れて行って、人目を忍んで楽しんだらどう……。細君に知れずに、二人近郊を散歩したらどう……。いや、それどころではない、その時、細君が懐妊しておったから、不図難産して死ぬ、その後のちにその女を入れるとしてどうであろう。……平気で後妻に入れることが出来るだろうかかなどと考えて歩いた。

神戸の女学院の生徒で、生れは備中びうちゆうの新見町にいみまちで、渠の著作の崇拜者で、名を横山芳子という女から崇拜の情を以て充された一通の手紙を受取ったのはその頃であった。竹中古城と謂えば、美文的小説を書いて、多少世間に聞えておったので、地方から来る崇拜者かっごうしや渴仰者かっごうしやの手紙はこれまでにも随分多かつた。やれ文章を直してくれの、弟子でしにしてくれのと一々取合ってはいられなかつた。だから

その女の手紙を受取っても、別に返事を出そうとまでその好奇心は募らなかつた。けれど同じ人の熱心なる手紙を三通まで貰もらっては、さすがの時雄も注意をせずにはいられなかつた。年は十九だそうだが、手紙の文句から推おして、その表情の巧みなのは驚くべきほどで、いかなることがあつても先生の門下生になつて、一生文学に従事したいとの切なる願望のぞみ。文字は走り書のすらすらしした字で、余程ハイカラの女らしい。返事を書いたのは、例の工場よの二階の室で、その日は毎日の課業の地理を二枚書いて止して、長い数尺に余る手紙を芳子に送った。その手紙には女の身として文学に携たづねることの不心得、女は生理的に母たるの義務を尽さなければならぬ理由、処女にして文学者たるの危険などを縷る々として説いて、幾らか罵倒ばとう的の文辞をも陳ならべて、これならもう愛想あいそをつかして断念あきらめて了しまうであるうと時雄は思つて微笑した。そして本箱の中から岡山県の地図を捜して、阿哲郡新見町の所在を研究した。山陽線から高梁川たかはしがわの谷を遡さかのぼって奥十数里、こんな山の中にもこんなハイカラの女があるかと思つと、それでも何となくなつたかしく、時雄はその附近の地形やら山やら川やらを仔細しさいに見た。

で、これで返辞をよこすまいと思つたら、それどころか、四日目には更に厚い封書が届いて、紫インキで、青い罫けいの入った西洋紙に横に細字で三枚、どうか将来見捨てずに弟子にしてくれという意味が返す返すも書いてあつて、父母に願つて許可を得たならば、東京に出て、然しかるべき学校に入つて、完全に忠実に文学を学んでみたいとのことであつた。時雄は女の志に感ぜずにはいられなかつた。東京でさえ——女学校を卒業したものでさえ、文

学の価値などは解らぬものなのに、何もかもよく知って
いるらしい手紙の文句、早速返事を出して師弟の関係を
結んだ。

それから度々の手紙と文章、文章はまだ幼稚な点はあ
るが、癖の無い、すらすらしした、将来発達の見込は十分
にあると時雄は思った。で一度は一度より段々互の気質
が知れて、時雄はその手紙の来るのを待つようになった。
ある時などは写真を送れと言って遣ろうと思つて、手紙
の隅に小さく書いて、そしてまたこれを黒々と塗つて了
った。女性には容色と謂うものが是非必要である。容色
のわるい女はいくら才があつても男が相手に為ない。時
雄も内々胸の中で、どうせ文学を遣ろうというような女
だから、容色に相違ないと思つた。けれどなるべくは
見られる位の女であつて欲しいと思つた。

芳子が父母に許可を得て、父に伴れられて、時雄の門
を訪うたのは翌年の二月で、丁度時雄の三番目の男の兄
の生れた七夜の日であつた。座敷の隣の室は細君の産褥
で、細君は手伝に來ている姉から若い女門下生の美しい
容色であることを聞いて少なからず懊惱した。姉もああ
いう若い美しい女を弟子にしてどうする気だろうと心配
した。時雄は芳子と父とを並べて、縷々として文学者の
境遇と目的を語り、女の結婚問題に就いて予め父親の
説を叩いた。芳子の家は新見町でも第三とは下らぬ豪家
で、父も母も嚴格なる基督教信者、母は殊にすぐれた信
者で、曾ては同志社女学校に学んだこともあるという。
総領の兄は英国へ洋行して、帰朝後は某官立学校の教授
となつてゐる。芳子は町の小学校を卒業するとすぐ、神
戸に出て神戸の女学院に入り、其処でハイカラな女学校

生活を送った。キリストの女学校に比して、文学に対して総て自由だ。その頃こそ「魔風恋風」や「金色夜叉」などを讀んではならんとの規定も出ていたが、文部省で干渉しない以前は、教場でさえなくば何を讀んでも差支なかつた。学校に附属した教会、其処で祈禱の尊いこと、クリスマス晩の面白いこと、理想を養うということの味をも知って、人間の卑しいことを隠して美しいことを標榜するという群の仲間となつた。母の膝下が恋しいとか、故郷が懐かしいとか言うことは、来た当座こそ切実に辛く感じもしたが、やがては全く忘れて、女学生の寄宿生活をこの上なく面白く思うようになった。旨味い南瓜を食べさせないと云っては、お鉢の飯に醬油を懸けて賄方を酷めたり、舎監のひねくれた老婦の顔色を見て、陰陽に物を言ったりする女学生の群の中に入っているのは、家庭に養われた少女のように、単純に物を見ることがどうして出来よう。美しいこと、理想を養うこと、虚栄心の高いこと——こういう傾向をいつとなしに受けて、芳子は明治の女学生の長所と短所とを遺憾なく備えていた。

尠くとも時雄の孤独なる生活はこれによって破られた。昔の恋人——今の細君。曾ては恋人には相違なかつたが、今は時勢が移り変つた。四五年來の女子教育の勃興、女子大学の設立、庇髪、海老茶袴、男と並んで歩くのをはにかむようなものは一人も無くなつた。この世の中に、旧式の丸髻、泥鴨のような歩き振、温順と貞節とより他に何物をも有せぬ細君に甘んじていることは時雄には何よりも情けなかつた。路を行けば、美しい今様の細君を連れての睦じい散歩、友を訪えば夫の席に出て流暢に会話

を賑かす若い細君、ましてその身が骨を折って書いた小説を読もうでもなく、夫の苦悶煩悶には全く風馬牛で、子供さえ満足に育てれば好いという自分の細君に対すると、どうしても孤独を叫ばざるを得なかった。「寂しき人々」のヨハンネスと共に、家妻というものの無意味を感ぜずにはいられなかった。これが——この孤独が芳子に由って破られた。ハイカラな新式な美しい女門下生が、先生！先生！と世にも豪い人のように渴仰して来るのに胸を動かさずに誰がおられようか。

最初の一月ほどは時雄の家に仮寓していた。華やかな声、艶やかな姿、今までの孤独な淋しいかれの生活に、何等の対照！産褥から出たばかりの細君を助けて、靴下を編む、襟巻を編む、着物を縫う、子供を遊ばせるといふ生々した態度、時雄は新婚当座に再び帰ったような気がして、家門近く来るとそそるように胸が動いた。門をあけると、玄関にはその美しい笑顔、色彩に富んだ姿、夜も今までは子供と共に細君がいぎたなく眠って、六畳の室に徒に明らかな洋燈も、却って侘しさを増すの種であったが、今は如何に夜更けて帰って来ても、洋燈の下には白い手が巧に編物の針を動かして、膝の上にある毛糸の丸い玉！賑かな笑声が牛込の奥の小柴垣の中に充ちた。

けれど一月ならずして時雄はこの愛すべき女弟子をその家に置く事の不可能なのを覚った。従順なる家妻は敢てその事に不服をも唱えず、それらしい様子も見せなかつたが、しかもその気色は次第に悪くなった。限りなき笑声の中に限りなき不安の情が充ち渡った。妻の里方の親戚間などには現に一問題として講究されつつあること

を知った。

時雄は種々に煩悶した後、細君の姉の家——軍人の未亡人で恩給と裁縫とで暮している姉の家に寄寓させて、其処から麴町の某女塾に通学させることにした。

三

それから今回の事件まで一年半の年月が経過した。

その間二度芳子は故郷を省した。短篇小説を五種、長篇小説を一種、その他美文、新体詩を数十篇作った。某女塾では英語は優等の出来で、時雄の選択で、ツルゲネーフの全集を丸善から買った。初めは、暑中休暇に帰省、二度目は、神経衰弱で、時々癩のような瘰癧を起すので、暫し故山の静かな処に帰って休養する方が好いという医師の勧めに従ったのである。

その寓していた家は麴町の土手三番町、甲武の電車の通る土手際で、芳子の書斎はその家での客座敷、八畳の間、前に往来の頻繁な道路があつて、がやがやと往来の人やら子供やらで喧しい。時雄の書斎にある西洋本箱を小さくしたような本箱が一閑張の机の傍にあつて、その上には鏡と、紅皿と、白粉の罎と、今一つシユウソカリの入った大きな罎がある。これは神経過敏で、頭脳が痛くつて為方が無い時に飲むのだという。本箱には紅葉全集、近松世話浄瑠璃、英語の教科書、ことに新しく買ったツルゲネーフ全集が際立って目に附く。で、未来の閨秀作家は学校から帰って来ると、机に向つて文を書くというよりは、寧ろ多く手紙を書くので、男の友達も随分多い。男文字の手紙も随分来る。中にも高等師範の学

生に一人、早稲田^{わせだ}大学の学生に一人、それが時々遊びに
来たことがあったそうだ。

麴町土手三番町の一角には、女学生もそうハイカラな
のが沢山居ない。それに、市ヶ谷見附の彼方^{あちら}には時雄の
妻君の里の家があるのだが、この附近は殊に昔風の商家
の娘が多い。で、尠^{すくな}くとも芳子の神戸仕込のハイカラは
あたりの人の目を聳^{そはだ}たしめた。時雄は姉の言葉として、
妻から常に次のようなことを聞される。

「芳子さんにも困ったものですねと姉が今日も言ってい
ましたよ、男の友達が来るのは好いけれど、夜など一緒
に二七（不動）に出かけて、遅くまで帰って来ないこと
があるんですって。そりゃ芳子さんはそんなことは無い
のに決っているけれど、世間の口が喧^{やかま}しくって為方^{しかた}が無
いと云っていました」

これを聞くと時雄は定^{きま}って芳子の肩を持つので、「お前
達のような旧式の間人には芳子の遣^やることなどは判^{わか}りや
せんよ。男女が二人で歩いたり話したりさえすれば、す
ぐあやしいとか変だとか思うのだが、一体、そんなこと
を思ったり、言ったりするのが旧式だ、今では女も自覚
しているから、為^なようと思うことは勝手にするさ」

この議論を時雄はまた得意になって芳子にも説法した。
「女子ももう自覚せんければいかん。昔の女のように依
頼心を持っていては駄目だ。ズウデルマンのマグダの言
った通り、父の手からすぐに夫の手に移るような意気地
なしでは為方が無い。日本の新しい婦人としては、自ら
考えて自ら行うようにしなければいかん」こう言っでは、
イブセン^{ドイッ}のノラの話や、ツルゲネーフのエレネの話や、
露西亞^{ロシア}、独逸^{ドイツ}あたりの婦人の意志と感情と共に富んでい

ることを話し、さて、「けれど自覚と云うのは、自省ということをも含んでおるですからな、無闇むやみに意志や自我を振廻しては困るですよ。自分の遣ったことには自分が全責任を帯びる覚悟がなくては」

芳子にはこの時雄の教訓が何より意味があるように聞えて、渴仰の念が愈※「#1の字点、1-2-22」ごよん加わった。キリスト基督教の教訓より自由でそして権威があるように考えられた。

芳子は女学生としては身装みなりが派手過ぎた。黄金きんの指環をはめて、流行を趁おった美しい帯をしめて、すっきりとした立姿は、路傍の人目を惹ひくに十分であった。美しい顔と云うよりは表情のある顔、非常に美しい時もあれば何だか醜い時もあった。眼に光りがあってそれが非常によく働いた。四五年前までの女は感情を顕あらわすのに極きわめて単純で、怒った容かたちとか笑った容とか、三種、四種位しかその感情を表わすことが出来なかったが、今では情を巧に顔に表わす女が多くなった。芳子もその一人である。と時雄は常に思った。

芳子と時雄との関係は単に師弟の間柄としては余りに親密であった。この二人の様子を観察したある第三者の女の一人が妻に向って、「芳子さんが来てから時雄さんの様子はまるで変りましたよ。二人で話しているところを見ると、魂は二人ともあくがれ渡っているようで、それは本当に油断がなりませんよ」と言った。他はたから見れば、無論そう見えたとに相違なかった。けれど二人は果してそう親密であったか、どうか。

若い女のうかれ勝な心、うかれるかと思えばすぐ沈む。些ささい細なことにも胸を動かし、つまらぬことにも心を痛め

る。恋でもない、恋でなくも無いというようなやさしい態度、時雄は絶えず思い惑った。道義の力、習俗の力、機会一度至ればこれを破るのは帛きぬを裂くよりも容易だ。唯ただ、容易たやすに來きたらぬはこれを破るに至る機会である。

この機会がこの一年の間に尠すくなくとも二度近寄ったと時雄は自分だけで思った。一度は芳子が厚い封書を寄せて、自分の不束ふつつかなこと、先生の高恩に報ゆることが出来ぬから自分は故郷に帰って農夫の妻になって田舎いなかに埋れて了しまおうということ涙交りに書いた時、一度は或る夜芳子が一人で留守番をしているところへゆくりなく時雄が行って訪問した時、この二度だ。初めの時は時雄はその手紙の意味を明かに了解した。その返事をいかに書くべきかに就いて一夜眠らずに懊惱おうのうした。穩かに眠れる妻の顔、それを幾度か窺うかがって自己の良心のいかに麻痺まひせるかを自ら責めた。そしてあくる朝贈った手紙は、嚴乎げんこたる師としての態度であった。二度目はそれから二月ほど経たった春の夜、ゆくりなく時雄が訪問すると、芳子は白粉おしろいをつけて、美しい顔をして、火鉢ひばちの前にぼつねんとしていた。「どうしたの」と訊きくと、

「お留守番ですの」

「姉は何処どこへ行った？」

「四谷へ買物に」

と言って、じっと時雄の顔を見る。いかにも艶なまめかしい。

時雄はこの力ある一瞥いちべつに意気地なく胸おどを躍おどらした。二語三語、普通のことを語り合ったが、その平凡なる物語が更に平凡でないことを互に思い知ったらしかった。

この時、今十五分も一緒に話し合ったならば、どうなったであろうか。女の表情の眼は輝き、言葉は艶なまめき、態

度がいかに尋常よのつねでなかった。

「今夜は大変綺麗きれいにしていますね？」

男は態わざと軽く出た。

「え、先程、湯に入りましたのよ」

「大変に白粉が白いから」

「あらまア先生！」と言って、笑って体を斜はすに嬌態きょうたいを呈した。

時雄はすぐ帰った。まア好いでしょうと芳子はたって留めたが、どうしても帰ると言うので、名残惜なごりしげに月の夜を其処そこまで送って来た。その白い顔には確かにある深い神秘が籠こめられてあった。

四月に入ってから、芳子は多病で蒼白あおしろい顔をして神経過敏に陥っていた。シヨウソカリを余程多量に服してもどうも眠られぬとて困っていた。絶えざる欲望と生殖の力とは年頃の女を誘うのに躊躇ちゆうちよしない。芳子は多く薬に親しんでいた。

四月末に帰国、九月に上京、そして今回こんどの事件が起った。

今回の事件とは他ほかでも無い。芳子は恋人を得た。そして上京の途次、恋人と相携えて京都嵯峨さかに遊んだ。その遊んだ二日の日数が出発と着京との時日に符合せぬので、東京と備中との間に手紙の往復があつて、詰問した結果は恋愛、神聖なる恋愛、二人は決して罪を犯してはおらぬが、将来は如何いかにしてもこの恋を遂げたいとの切なる願望ねがひ。時雄は芳子の師として、この恋の証人として一面月下氷人の役目を余儀なくさせられたのであった。

芳子の恋人は同志社の学生、神戸教会の秀才、田中秀夫、年二十一。

芳子は師の前にその恋の神聖なるを神懸けて誓った。故郷の親達は、学生の身で、ひそかに男と嵯峨に遊んだのは、既にその精神の墮落であると云ったが、決してそんな汚れた行為はない。互に恋を自覚したのは、寧ろ京都で別れてからで、東京に帰って来てみると、男から熱烈なる手紙が来ていた。それで始めて将来の約束をしたような次第で、決して罪を犯したようなことは無いと女は涙を流して言った。時雄は胸に至大の犠牲を感じながらも、その二人の所謂神聖なる恋の為に力を尽すべく余儀なくされた。

時雄は悶えざるを得なかった。わが愛するものを奪われたということは甚だしくその心を暗くした。元より進んでその女弟子を自分の恋人にする考は無い。そういう明らかな定った考があれば前に既に二度までも近寄って来た機会を攫むに於て敢て躊躇するところは無い筈だ。けれどその愛する女弟子、淋しい生活に美しい色彩を添え、限りなき力を添えてくれた芳子を、突然人の奪い去るに任すに忍びようか。機会を二度まで攫むことは躊躇したが、三度来る機会、四度来る機会を待って、新なる運命と新なる生活を作りたいとはかれの心の底の底の微かなる願であった。時雄は悶えた、思い乱れた。妬みと惜しみと悔恨との念が一緒になって旋風のように頭脳の中を回転した。師としての道義の念もこれに交って、益※「#二の字点、1-2-22」炎を熾んにした。わが愛する女の幸福の為めという犠牲の念も加わった。で、夕暮の膳の上の酒は夥しく量を加えて、泥鴨の如く酔って寝た。あくる日は日曜日の雨、裏の森にざんざん降って、時

雄の為めには一倍に侘しい。櫛の古樹に降りかかる雨の脚、それが実に長く、限りない空から限りなく降っていとしか思われない。時雄は読書する勇氣も無い、筆を執る勇氣もない。もう秋で冷々と背中の冷たい藤椅子に身を横えつつ、雨の長い脚を見ながら、今回の事件からその身の半生のことを考えた。かれの経験にはこういう経験が幾度もあった。一步の相違で運命の唯中に入ることが出来ずに、いつも圏外に立たせられた淋しい苦悶、その苦しい味をかれは常に味った。文学の側でもそうだが、社会の側でもそうだ。恋、恋、恋、今になってもこんな消極的な運命に漂わされているかと思うと、その身の意気地なしと運命のつたないことがひしひしと胸に迫った。ツルゲネーフのいわゆる **Superfluous man** ！だと思つて、その主人公の儂い一生を胸に繰返した。

寂寥に堪えず、午から酒を飲むと言出した。細君の支度の為ようが遅いのでぶつぶつ言っていたが、膳に載せられた肴がまずいので、遂に癩癩を起して、自棄に酒を飲んだ。一本、二本と徳利の数は重って、時雄は時の間に泥の如く酔った。細君に対する不平ももう言わなくなつた。徳利の酒が無くなると、只、酒、酒と言うばかりだ。そしてこれをぐいぐいと呷る。氣の弱い下女はどうしたことかと呆れて見ておつた。男の兎の五歳になるのを始めは頻りに可愛がって抱いたり撫でたり接吻したりしていたが、どうしたはずみでか泣出したのに腹を立てて、ピシャピシャとその尻を乱打したので、三人の子供は怖がって、遠巻にして、平生に似もやらぬ父親の赤く酔つた顔を不思議そうに見ていた。一升近く飲んでそのまま其処に酔倒れて、お膳の筋斗がえりを打つのに頓着し

なかったが、やがて不思議なだらだらした節で、十年も前にはやった幼稚な新体詩を歌い出した。

君が門辺をさまよふは

巷の塵を吹き立つる

嵐のみとやおぼすらん。

その嵐よりいやあれに

その塵よりも乱れたる

恋のかばねを暁の

歌を半ばにして、細君の被けた蒲団を着たまま、すつくと立上って、座敷の方へ小山の如く動いて行った。何処へ？ 何処へいらっしゃるんです？ と細君は気が気でなくその後を追って行ったが、それにも関わらず、蒲団を着たまま、廁の中に入ろうとした。細君は慌てて、「貴郎、貴郎、酔っぱらってはいやですよ。そこは手水場ですよ」

突如蒲団を後から引いたので、蒲団は廁の入口で細君の手に残った。時雄はふらふらと危く小便をしていたが、それがすむと、突如※「#「革十堂」、第3水準 1-93-80」と廁の中に横に寝てしまった。細君が汚がって頻りに揺ったり何かしたが、時雄は動こうとも立とうとも為ない。そうかと云って眠ったのではなく、赤土のような顔に大きい鋭い目を明いて、戸外に降り頻る雨をじっと見ている。

四

時雄は例刻をてくてくと牛込矢来町の自宅に帰って来た。

渠は三日間、その苦悶と戦った。渠は性として惑溺することが出来ぬ或る一種の力を有っている。この力の為めに支配されるのを常に口惜しく思っているのではあるが、それでもいつか負けて了う。征服されて了う。これが為め渠はいつも運命の圏外に立って苦しい味を嘗めさせられるが、世間からは正しい人、信頼するに足る人と信じられてゐる。三日間の苦しい煩悶、これどにかく渠はその前途を見た。二人の間の関係は一段落を告げた。これからは、師としての責任を尽して、わが愛する女の幸福の為めを謀るばかりだ。これはつらい、けれどつらいのが人生だ！ と思ひながら帰つて来た。

門をあけて入ると、細君が迎えに出た。残暑の日はまだ暑く、洋服の下襦袢がびっしり汗にぬれている。それを糊のついた白地の単衣に着替えて、茶の間の火鉢の前に坐ると、細君はふと思ひ附いたように、箆笥の上の一封の手紙を取出し、

「芳子さんから」

と言つて渡した。

急いで封を切った。巻紙の厚いのを見ても、その事件に關しての用事に相違ない。時雄は熱心に読下した。

言文一致で、すらすらとこの上ない達筆。

先生――

実は御相談に上りたいと存じましたが、余り急でしたものでしたから、独断で実行致しました。

昨日四時に田中から電報が参りまして、六時に新橋の停車場に着くとのことですので、私はどんなに驚きましたか知れません。

何事も無いのに出て来るような、そんな軽率な男でな

いと信じておりますだけに、一層甚はなはだしく気を揉もみましました。先生、許して下さい。私はその時刻に迎えに参りましたのです。逢あって聞きますと、私の一伍一什いちぶしじゅうを書いた手紙を見て、非常に心配して、もしこの事があつた為め万一郷里に伴つれて帰られるようなことがあつて、自分が済まぬと言うので、学事をも捨てて出京して、先生にすっかりお打明申して、お詫わびも申上げ、お情にも縋すがって、万事円満に参るようと、そういう目的で急に出て参ったとこのことで御座います。それから、私は先生にお話し申した一伍一什、先生のお情深い言葉、将来までも私等二人の神聖な真面目まじめな恋の証人とも保護者ともなつて下さるということを話しましたところ、非常に先生の御情に感激しまして、感謝の涙に暮れました次第で御座います。

田中は私の余りに狼狽ろうばいした手紙に非常に驚いたと見えまして、十分覚悟をして、万一破壊の暁にはと言つた風なことも決心して参りましたので御座います。万一の時にはあの時嵯峨さかに一緒に参つた友人を証人にして、二人の間が決して汚けがれた関係の無いことを弁明し、別れて後互に感じた二人の恋愛をも打明けて、先生にお縋り申して郷里の父母の方へも逐一言ちくいちつて頂こうと決心して参りましたそうです。けれどこの間の私の無謀で郷里の父母の感情を破っている矢先、どうしてそんなことを申して遣つかわされましよう。今は少時しばらく沈黙して、お互に希望を持って、専心勉学に志し、いつか折を見て——或は五年、十年の後かも知れませんが——打明けて願う方が得策だと存じまして、そういうことに致しました。先生のお話をも一切話して聞かせました。で、

用事が済んだ上は帰した方が好いのですけれど、非常に疲れている様子を見ましては、さすがに直ちに引返すようにとも申兼ねました。(私の弱いのを御許し下さいまし) 勉学中、実際問題に触れてはならぬとの先生の御教訓は身にしみて守るつもりで御座いますが、一先、旅籠屋はたごやに落着かせまして、折角出て来たものですから、一日位見物しておいでなさいと、つい申してしまいました。どうか先生、お許し下さいまし。私共も激しい感情の中に、理性も御座いますから、京都でしたような、仮りにも常識を外れた、他人から誤解されるようなことは致しません。誓って、決して致しません。末ながら奥様にも宜しく申上げて下さいまし。

「#地から2字上げ」芳子

「#ここから4字下げ」

先生 御もと

「#ここで字下げ終わり」

この一通の手紙を読んでいる中、さまさまの感情が時雄の胸を火のように燃えて通った。その田中という二十一の青年が現にこの東京に来ている。芳子が迎えに行った。何をしたか解らん。この間言ったこともまるで虚言かも知れぬ。この夏期の休暇に須磨で落合った時から出ていて、京都での行為もその望を満す為め、今度も恋しさに堪え兼ねて女の後を追って上京したのかも知れぬ。手を握ったろう。胸と胸とが相触れたろう。人が見ていぬ旅籠屋の二階、何を為ているか解らぬ。汚れる汚れぬのも刹那の間だ。こう思うと時雄は堪らなくなった。「監督者の責任にも関する！」と腹の中で絶叫した。こうしてはおかれぬ、こういう自由を精神の定まらぬ女に与え

ておくことは出来ん。監督せんければならん、保護せんけりやならん。私共は熱情もあるが理性がある！ 私共とは何だ！ 何故私とは書かぬ、何故複数を用いた？ 時雄の胸は嵐あらしのように乱れた。着いたのは昨日の六時、姉の家に行って聞き糺ただせば昨夜何時頃に帰ったか解るが、今日はどうした、今はどうしている？

細君の心を尽した晚餐ばんさんの膳ぜんには、鮪まぐろの新鮮な刺身に、青紫蘇あおじその薬味を添えた冷豆腐ひややっこ、それを味う余裕もないが、一盃いっばいは一盃と盞さかずきを重ねた。

細君は末の児を寝かして、火鉢の前に来て坐ったが、芳子の手紙の夫の傍にあるのに眼を附けて、

「芳子さん、何て言っ来て来たのです？」

時雄は黙って手紙を投げて遣やった、細君はそれを受取りながら、夫の顔をじろりと見て、暴風の前に来る雲行の甚だ急なのを知った。

細君は手紙を読終って巻きかえしながら、

「出て来たのですね」

「うむ」

「ずっと東京に居るんでしうか」

「手紙に書いてあるじゃないか、すぐ帰すッて……」

「帰るでしうか」

「そんなこと誰が知るものか」

夫の語気が烈はげしいので、細君は口を噤つぶんで了った。少時しばらく経たってから、

「だから、本当に厭いやき、若い娘の身で、小説家になるなんぞッて、望む本人も本人なら、よこす親達も親達ですからね」

「でも、お前は安心したろう」と言おうとしたが、それ

は止して、

「まあ、そんなことはどうでも好いさ、どうせお前達には解らんのだから……それよりも酌でもしたらどうだ」

温順な細君は徳利を取上げて、京焼の盃さかずきに波々と注ぐ。時雄は頻りに酒を呷あおった。酒でなければこの鬱うっを遣るに堪えぬといわぬばかりに。三本目に、妻は心配して、

「この頃はどうか為ましたね」

「何故？」

「酔ってばかりいるじゃありませんか」

「酔うということがどうかしたのか」

「そうでしょう、何か気に懸ることがあるからでしょう。」

芳子さんのことなどはどうでも好いじゃありませんか」

「馬鹿！」

と時雄は一喝かつした。

細君はそれにも懲りずに、

「だって、余り飲んでは毒ですよ、もう好い加減になさい、また手水場ちようずばにでも入って寝ると、貴郎あなたは大きいから、私と、お鶴（下女）の手ぐらいではどうにもなりやしませんからさ」

「まあ、好いからもう一本」

で、もう一本を半分位飲んだ。もう酔は余程廻ったらしい。顔の色は赤銅色しゃくどういろに染って眼が少しく据っていた。

急に立上って、

「おい、帯を出せ！」

「何処どこへいらっしゃる」

「三番町まで行って来る」

「姉の処？」

「うむ」

「およしなさいよ、危ないから」

「何アに大丈夫だ、人の娘を預って監督せずに投遣なげやりにはしておかれん。男がこの東京に来て一緒に歩いたり何かしているのを見ぬ振をしてはおかれん。田川（姉の家の姓）に預けておいても不安心だから、今日、行って、早かったら、芳子を家に連れて来る。二階を掃除しておけ」

「家に置くんですか、また……」

「勿論」

細君は容易に帯と着物とを出そうともせぬので、

「よし、よし、着物を出さんのなら、これで好い」と、白地の単衣ひとえに唐縮緬とうちりめんの汚れたへこ帯、帽子も被かぶらずに、そのままに急いで戸外へ出た。「今出しますから……：本當に困ってろう」という細君の声が後に聞えた。

夏の日はもう暮れ懸っていた。矢来の酒井の森には烏からすの声が喧やかましく聞える。どの家でも夕飯が済んで、門口に若い娘の白い顔も見える。ボールを投げている少年もある。官吏らしい鱒髭どじょうひげの紳士が庇髪ひしがみの若い細君を伴つれて、神楽坂かぐらざかに散歩に出懸けるのにも幾組か邂逅であした。時雄は激昂げきこうした心と泥酔した身体とに烈はげしく漂わされて、四辺あたりに見ゆるものが皆な別の世界のもののように思われた。両側の家も動くよう、地も脚の下に陥るよう、天も頭の上に蔽おほい冠かぶさるように感じた。元からさ程強い酒量でないのに、無闇むやみにぐいぐいと呷あおったので、一時に酔が発したのである。ふと露西亞ロシアの賤民せんみんの酒に酔って路傍に倒れて寝ているのを思い出した。そしてある友人と露西亞の人間はこれだから豪えらい、惑溺わくどするなら飽あくまで惑溺せんければ駄目だと言ったことを思いだした。馬鹿な！ 恋に師弟の別があつて堪るものかと口へ出して言った。

中根坂を上って、士官学校の裏門から佐内坂の上まで来た頃は、日はもうとつぷりと暮れた。白地の浴衣がぞろぞろと通る。煙草屋の前に若い細君が出ている。氷屋の暖簾が涼しそうに夕風に靡く。時雄はこの夏の夜景を朧げに眼には見ながら、電信柱に突当って倒れそうにしたり、浅い溝に落ちて膝頭をついたり、職工体の男に、「酔漢奴！　しっかり歩け！」と罵られたりした。急に自ら思いついたらしく、坂の上から右に折れて、市ヶ谷八幡の境内へと入った。境内には人の影もなく寂寞としていた。大きい古い櫟の樹と松の樹とが蔽い冠さって、左の隅に珊瑚樹の大きいのが繁っていた。処々の常夜燈はそろそろ光を放ち始めた。時雄はいかにしても苦しいので、突如その珊瑚樹の蔭に身を躲して、その根本の地上に身を横えた。興奮した心の状態、奔放な情と悲哀の快感とは、極端までその力を発展して、一方痛切に嫉妬の念に駆られながら、一方冷淡に自己の状態を客観した。初めて恋するような熱烈な情は無論なかった。盲目にその運命に従うと謂うよりは、寧ろ冷かにその運命を批判した。熱い主観の情と冷めたい客観の批判とが絡り合せた糸のように固く結び着けられて、一種異様の心の状態を呈した。

悲しい、実に痛切に悲しい。この悲哀は華やかな青春の悲哀でもなく、単に男女の恋の上の悲哀でもなく、人生の最奥に秘んでいるある大きな悲哀だ。行く水の流、咲く花の凋落、この自然の底に蟠れる抵抗すべからざる力に触れては、人間ほど儂い情ないものはない。

茫然として涙は時雄の鬚面を伝った。ふとある事が胸に上った。時雄は立上って歩き出した。

もう全く夜になった。境内の処々に立てられた硝子燈ガラスとうは光を放って、その表面の常夜燈という三字がはっきり見える。この常夜燈という三字、これを見てかれは胸を衝いた。この三字をかれは曾て深い懊惱おうのうを以て見たことは無いだろうか。今の細君が大きい桃割ももわれに結って、このすぐ下の家に娘で居た時、渠かれはその微かな琴の音ねの髣髴ほうふつをだに得たいと思つてよくこの八幡の高台に登った。かの女を得なければ寧ろ南洋の植民地に漂泊しようというほどの熱烈な心を抱いて、華表、長い石階、社殿、俳句の懸行燈、この常夜燈の三字にはよく見入つて物を思つたものだ。その下には依然たる家屋、電車の轟とどろきこそおりおり寂寞せきぼくを破つて通るが、その妻の実家の窓には昔と同じように、明かに燈の光が輝けみいていた。何たる節操なき心ぞ、僅かわずに八年の年月を閲けみしたばかりであるのに、こうも変ろうとは誰が思おう。その桃割姿まるまげすがたにして、楽しく暮したその生活がどうしてこういう荒涼たる生活に變つて、どうしてこういう新しい恋を感ずるようになったか。時雄は我ながら時の力の恐ろしいのを痛切に胸に覺えた。けれどその胸にある現在の事實は不思議にも何等の動揺をも受けなかつた。

「矛盾でもなんでも為方がない、その矛盾、その無節操、これが事實だから為方がない、事実！ 事実！」

と時雄は胸の中に繰返した。

時雄は堪え難い自然の力の圧迫に圧せられたもののように、再び傍の口ハ台に長い身を横えた。ふと見ると、赤銅しゃくどうのような色をした光芒ひかりの無い大きな月が、お濠ほりの松の上に音も無く昇つていた。その色、その状かたち、その姿がいかにも侘わびしい。その侘しさがその身の今の侘しさによ

く適^{かな}っている時雄は思つて、また堪え難い哀愁がその胸に漲^{みなぎ}り渡った。

酔は既に醒^さめた。夜露は置始めた。

土手三番町の家の前に来た。

覗^{のぞ}いてみたが、芳子の室に燈火の光が見えぬ。まだ帰つて来ぬとみえる。時雄の胸はまた燃えた。この夜、この暗い夜に恋しい男と二人！何をしているか解らぬ。こういう常識を欠いた行為を敢^{あえ}てして、神聖なる恋とは何事？汚れたる行為の無いのを弁明するとは何事？

すぐ家に入ろうとしたが、まだ当人が帰つておらぬの上つても為方が無いと思つて、その前を真直^{まっすぐ}に通り返した。女と摩違^{すれちが}う度^{たび}に、芳子ではないかと顔を覗きつつ歩いた。土手の上、松の木蔭、街道の曲り角、往来の人に怪まるるまで彼方^{あつちこつち}此方を徘徊^{はいかい}した。もう九時、十時に近い。いかに夏の夜であるからと言つて、そう遅くまで出歩いている筈^{はず}が無い。もう帰つたに相違ないと思つて、引返して姉の家に行つたが、矢張りまだ帰っていない。

時雄は家に入った。

奥の六畳に通るや否、

「芳さんはどうしました？」

その答より何より、姉は時雄の着物に夥^{おびただ}しく泥の着いているのに驚いて、

「まあ、どうしたんです、時雄さん」

明かな洋燈^{ランテ}の光で見ると、なるほど、白地の浴衣^{ゆかた}に、肩、膝、腰の嫌^{きら}いなく、夥^{おびただ}しい泥痕^{どろあと}！

「何アに、其処^{そこ}でちよつと転んだものだから」

「だって、肩まで粘^っいているじゃありませんか。また、酔ッぱらったんでしよう」

だもの。いつかなども余り男と一緒に歩いたり何かするものだから、角の交番でね、不審にしてね、角袖巡査が家の前に立っていたことがあったと云いますよ。それはそんなことは無いんだから、構いはしませんけどもね……」

「それはいつのことですか？」

「昨年の暮でしたかね」

「どうもハイカラ過ぎて困る」と時雄は言ったが、時計の針の既に十時半の処を指すのを見て、「それにしてもどうしたんだらう。若い身空で、こう遅くまで一人で出て歩くと言うのは？」

「もう帰って来ますよ」

「こんなことは幾度もあるんですか」

「いいえ、滅多にありませんよ。夏の夜だから、まだ宵の口位に思っ歩いていてるんですよ」

姉は話しながら裁縫の針を止めぬのである。前に鴨脚の大きい裁物板が据えられて、彩絹の裁片や糸や鋏やが順序なく四面に乱れている。女物の美しい色に、洋燈の光が明かに照り渡った。九月中旬の夜は更けて、稍々肌寒く、裏の土手下を甲武の貨物汽車がすさまじい地響を立てて通る。

下駄の音がする度に、今度こそは！ 今度こそは！と待渡ったが、十一時が打って間もなく、小きぎみな、軽い後齒の音が静かな夜を遠く響いて来た。

「今度のこそ、芳子さんですよ」

と姉は言った。

果してその足音が家の入口の前に留って、がらがらと格子が開く。

「芳子さん？」

「ええ」

と艶やかな声がする。

玄関から丈の高い庇髪の美しい姿がすっと入って来たが、

「あら、まア、先生！」

と声を立てた。その声には驚愕と当惑の調子が十分に籠っていた。

「大変遅くなって……」と言って、座敷と居間との間の間の処に来て、半ば坐って、ちらりと電光のように時雄の顔色を窺ったが、すぐ紫の袱紗に何か包んだものを出して、黙って姉の方に押遣った。

「何ですか……お土産？ いつもお気の毒ね？」

「いいえ、私も召上るんですもの」

と芳子は快活に言った。そして次の間へ行こうとしたのを、無理に洋燈の明るい眩しい居間の一隅に坐らせた。美しい姿、当世流の庇髪、派手なネルにオリイヴ色の夏帯を形よく緊めて、少し斜に坐った艶やかさ。時雄はその姿と相對して、一種状すべからざる満足を感じ、今までの煩悶と苦痛とを半ば忘れて了った。有力な敵があっても、その恋人をだに占領すれば、それで心の安まるのは恋する者の常態である。

「大変に遅くなって……」

いかにも遣瀨ないというように微かに弁解した。

「中野へ散歩に行ったッて？」

時雄は突如として問うた。

「ええ……」芳子は時雄の顔色をまたちらりと見た。

姉は茶を淹れる。土産の包を開くと、姉の好きな好き

なシユウクリーム。これはマアお旨いしいと姉の声。で、暫しばらく一座はそれに気を取られた。

少時しばらくしてから、芳子が、

「先生、私の帰るのを待っていて下さったの？」

「ええ、ええ、一時間半位待ったのよ」

と姉が傍そばから言った。

で、その話が出て、都合さえよくば今夜からでも——荷物は後からでも好いから——一緒に伴つれて行く積うなずりで来たということをした。芳子は下を向いて、點頭うなずいて聞いていた。無論、その胸には一種の圧迫を感じたに相違ないけれど、芳子の心にしては、絶対に信賴むしして——今回の恋のことにも全心を挙げて同情してくれた師の家に行つて住むことは別に甚はなはだしい苦痛でも無かつた。寧ろ以前からこの昔風の家同居しているのを不快に思つて、出来るならば、初めのように先生の家にと願おほつていたのであるから、今の場合でなければ、かえつて大に喜んだのであるように……

時雄は一刻も早くその恋人のことを聞き糺ただしたかつた。今、その男は何処どこにいる？ 何時いつ京都に帰るか？ これは時雄に取つては実に重大な問題であつた。けれど何も知らぬ姉の前で、打明けて問う訳にも行かぬので、この夜は露ほどもそのことを口に出さなかつた。一座は平凡な物語に更ふけた。

今夜にもと時雄の言出したのを、だつて、もう十二時だ、明日にした方が宜よかろうとの姉の注意。で、時雄は一人で牛込に帰ろうとしたが、どうも不安心で為方がないような気がしたので、夜の更けたのを口実に、姉の家に泊つて、明朝早く一緒に行くことにした。

芳子は八畳に、時雄は六畳に姉と床を並べて寝た。やがて姉の小さい鼾いびきが聞えた。時計は一時をカンと鳴った。八畳では寝つかれぬと覚しく、おりおり高い長大息ためいきの氣勢けはいがする。甲武の貨物列車が凄じい地響すさまを立てて、この深夜を独り通る。時雄も久しく眠られなかった。

五

翌朝時雄は芳子を自宅に伴った。二人になるより早く、時雄は昨日の消息を知ろうと思ったけれど、芳子が低頭勝うつむきがちに悄然しやうぜんとして後について来るのを見ると、何となく可哀かわいそうになって、胸に苛々いらいらする思を畳みながら、黙して歩いた。

佐内坂を登り了ると、人通りが少なくなった。時雄はふと振り返って、「それでどうしたの？」と突如たずとして訊ねた。「え？」

反問した芳子は顔を曇らせた。

「昨日の話さ、まだ居るのかね」

「今夜の六時の急行で帰ります」

「それじゃ送って行かなくなってはいけないじゃないか」
「いいえ、もう好いんですの」

これで話は途絶えて、二人は黙って歩いた。

矢来町の時雄の宅、今まで物置にしておいた二階の三畳と六畳、これを綺麗きれいに掃除して、芳子の住居すまいとした。久しく物置——子供の遊び場あそびばにしておいたので、塵埃ちりが山のように積っていたが、箒ほうきをかけ雑巾ぞうきんをかけ、雨のしみの附いた破れた障子を貼り更えると、こうも変るものかと思われるほど明るくなって、裏の酒井の墓塋はかの大樹

の繁茂しげりが心地よき空翠みどりをその一室に漲みなぎらした。隣家の葡萄棚ぶどうだな、打捨てて手を入れようとせぬ庭の雑草の中に美人草の美しく交って咲いているのも今更に目につく。時雄はさる画家の描いた朝顔の幅ふくを選んで床に懸け、懸花瓶けんかびんには後おくれ咲の薔薇ばらの花を※「#「挿」のつくりの縦棒が下に突き抜ける、第4水準 2-13-28」した。午頃ひるごろに荷物が着いて、大きな支那靴しなかばん、柳行李やなぎごうり、信玄袋、本箱、机、夜具、これを二階に運ぶのには中々骨が折れる。時雄はこの手伝いに一日社を休むべく余儀なくされたのである。

机を南の窓の下、本箱をその左に、上に鏡やら紅皿べにざらやら罎びんやらを順序よく並べた。押入の一方には支那靴、柳行李、更紗さらさの蒲団ふとん夜具の一组を他の一方に入れようとした時、女の移香うつりがが鼻を撲うったので、時雄は変な気になった。

午後二時頃には一室が一先ず整頓せいとんした。

「どうです、此処ここも居心は悪くないでしょう」時雄は得意そうに笑って、「此処ここに居て、まあ緩ゆるくり勉強するです。本当に実際問題に触れてつまらなく苦勞くろうしたって為方がないですからねえ」

「え……」と芳子は頭を垂れた。

「後で詳しく聞きましょうが、今の中うちは二人共じつとして勉強していなくて、為方がないですからね」

「え……」と言って、芳子は顔を挙げて、「それで先生、私達もそう思って、今はお互に勉強して、将来に希望を持って、親の許諾ゆるしをも得たいと存じておりますの！」

「それが好いのです。今、余り騒ぐと、人にも親にも誤解されて了って、折角の真面目な希望も遂げられなくなり

ますから」

「ですから、ね、先生、私は一心になつて勉強しようと思ひますの。田中もそう申しておりました。それから、先生に是非お目にかかつてお礼を申上げなければ濟まないと申しておりましたけれど……よく申上げてくれッて……」

「いや……」

時雄は芳子の言葉の中に、「私共」と複数を遣うのと、もう公然許嫁の約束でもしたかのようになつたのを不快に思った。まだ、十九か二十の妙齡の処女が、こうした言葉を口にするのを怪しんだ。時雄は時代の推移つたのを今更のよう感じた。当世の女学生氣質のいかに自分等の恋した時代の処女氣質と異つてゐるかを思った。勿論、この女学生氣質を時雄は主義の上、趣味の上から喜んで見ていたのは事実である。昔のような教育を受けでは、到底今の明治の男子の妻としては立つて行かれぬ。女子も立たねばならぬ、意志の力を十分に養わねばならぬとはかれの持論である。この持論をかれは芳子に向つても尠からず鼓吹した。けれどこの新派のハイカラの實行を見てはさすがに眉を顰めずにはいられなかつた。

男からは国府津の消印で帰途に就いたという端書が着いて翌日三番町の姉の家から届けて来た。居間の二階には芳子が居て、呼べば直ぐ返事をして下りて来る。食事には三度三度膳を並べて団欒して食う。夜は明るい洋燈を取巻いて、賑わしく面白く語り合う。靴下は編んでくれる。美しい笑顔を絶えず見せる。時雄は芳子を全く占領して、とにかく安心もし満足もした。細君も芳子に恋

人があるのを知ってから、危険の念、不安の念を全く去った。

芳子は恋人に別れるのが辛かった。成ろうことなら一緒に東京に居て、時々顔をも見、言葉をも交えたかった。けれど今の際それは出来難いことを知っていた。二年、三年、男が同志社を卒業するまでは、たまさかの雁の音信をたよりに、一心不乱に勉強しなければならぬと思った。で、午後からは、以前の如く麴町の某英学塾に通い、時雄も小石川の社に通った。

時雄は夜などおりおり芳子を自分の書齋に呼んで、文学の話、小説の話、それから恋の話をするところがある。そして芳子の為めにその将来の注意を与えた。その時の態度は公平で、率直で、同情に富んでいて、決して泥酔して厠に寝たり、地上に横たわったりした人とは思われない。さればと言って、時雄はわざとそういう態度にするのではない、女に対している刹那——その愛した女の歡心を得るには、いかなる犠牲も甚だ高価に過ぎなかつた。

で、芳子は師を信頼した。時期が来て、父母にこの恋を告ぐる時、旧思想と新思想と衝突するようなことがあっても、この恵深い師の承認を得さえすればそれで沢山だとまで思った。

九月は十月になった。さびしい風が裏の森を鳴らして、空の色は深く碧く、日の光は透通った空気に射渡って、夕の影が濃くあたりを隈どるようになった。取り残した芋の葉に雨は終日降頻って、八百屋の店には松茸が並べられた。垣の虫の声は露に衰えて、庭の桐の葉も脆くも落ちた。午前の中の一時間、九時より十時までを、ツル

ゲネーフの小説の解釈、芳子は師のかがやく眼の下に、机に斜はすに坐まって、「オン、ゼ、イブ」の長い長い物語に耳を傾けた。エレネの感情に烈はげしく意志の強い性格と、その悲しい悲壮なる末路とは如何いかにかの女を動かしたか。芳子はエレネの恋物語を自分に引くらべて、その身を小説の中に置いた。恋の運命、恋すべき人に恋する機会がなく、思いも懸けぬ人にその一生を任した運命、實際芳子の当時の心情そのままであった。須磨の浜で、ゆくりなく受取った百合ゆりの花の一葉の端書、それがこうした運命になろうとは夢にも思い知らなかったのである。

雨の森、闇の森、月の森に向って、芳子はさまざまだ時に湖水上に夕日が美しく射渡って、旅館の中庭に、萩はぎが絵のように咲乱れていた。その二日の遊は実に夢のようであったと思つた。続いてまだその人を恋せぬ前のと、須磨の海水浴、故郷の山の中の月、病氣にならぬ以前、殊ことにその時の煩悶はんもんを考えると、頬ほおがおのずから赧あかくなった。

空想から空想、その空想はいつか長い手紙となって京都に行った。京都からも殆ほとんど隔日へつじつのように厚い厚い封書が届いた。書いても書いても尽くされぬ二人の情——余りその文通の頻繁ひんぱんなのに時雄は芳子の不在を窺うかがって、監督ひきだしという口実くわくじの下にその良心を抑えて、こっそり机の抽出ひきだしやら文箱ふぼこやらをさがした。捜し出した二三通の男の手紙を走り読みに読んだ。

恋人のするような甘つたるい言葉は到る処に満ちていた。けれど時雄はそれ以上にある秘密を捜し出そうと苦心した。接吻せつぶんの痕あと、性慾せいよくの痕が何処かに顕あらわれておりは

せぬか。神聖なる恋以上に二人の間は進歩しておりはせぬか、けれど手紙にも解らぬのは恋のまことの消息であった。

一カ月は過ぎた。

ところが、ある日、時雄は芳子に宛てた一通の端書を受取った。英語で書いてある端書であった。何気なく読むと、一月ほどの生活費は準備して行く、あとは東京で衣食の職業が見附かるかどうかという意味、京都田中としてあった。時雄は胸を轟かした。平和は一時にして破れた。

晩餐後、芳子はその事を問われたのである。

芳子は困ったという風で、「先生、本当に困ってしまつたんです。田中が東京に出て来ると云うのですもの、私は二度、三度まで止めて遣つたんですけれど、何だか、宗教に従事して、虚偽に生活してるんですが、今度の動機で、すっかり厭になつて了つたとか何とかで、どうしても東京に出て来るツて言うんですよ」

「東京に来て、何をするつもりなんだ？」

「文学を遣りたいと——」

「文学？ 文学ツて、何だ。小説を書こうと言うのか」

「え、そうでしょう……」

「馬鹿な！」

と時雄は一喝した。

「本当に困つて了うんですの」

「貴嬢はそんなことを勧めたんじゃないか」

「いいえ」と烈しく首を振って、「私はそんなこと……私は今の場合困るから、せめて同志社だけでも卒業してくれツて、この間初めに申して来た時に達つて止めて遣つ

たんですけれど……もうすっかり独断でそうしてээったんですッて。今更取かえしがつかぬようになってээったんですッて」

「どうして？」

「神戸の信者で、神戸の教会の爲めに、田中に学資を出してくれている神津こうつという人があるのです。その人に、田中が宗教は自分には出来ぬから、将来文学で立とうと思う。どうか東京に出してくれと言って遣ったんですの。すると大層怒って、それならもう構わぬ、勝手にしろと言われて、すっかり支度をしてしまったんですッて、本当に困ってээいますの」

「馬鹿な！」

と言ったが、「今一度留めて遣んなさい。小説で立とうなんて思ったッて、とても駄目だ、全く空想だ、空想の極端だ。それに、田中が此方こちに出て来ていては、貴嬢の監督上、私が非常に困る。貴嬢の世話も出来んようになるから、厳きびしく止めて遣んなさい！」

芳子は愈よ※「#二の字点、1-2-22」困こまったという風で、「止めてはやりませけれど、手紙が行違ちがいになるかも知れませんかから」

「行違ちがい？ それじゃもう来るのか」

時雄は眼を※「#「目+争」、第3水準 1-88-85」みはった。「今来た手紙に、もう手紙をよこしてくれても行違ちがいになるからと言ってよこしたんですから」

「今来た手紙ッて、さっきの端書の又後に来たのか」
芳子は点頭うなずいた。

「困ったね。だから若い空想家は駄目だと言うんだ」
平和は再び攪乱かきみださるることとなった。

一日置いて今夜の六時に新橋に着くという電報があった。電報を持って、芳子はまごまごしていた。けれど夜ひとり若い女を出して遣る訳に行かぬので、新橋へ迎えに行くことは許さなかつた。

翌日は逢って達って諫めてどうしても京都に還らせるようにすると言って、芳子はその恋人の許を訪うた。その男は停車場前のつるやという旅館に宿っているのである。

時雄が社から帰った時には、まだとても帰るまいと思つた芳子が既にその笑顔を玄関にあらわしていた。聞くと田中は既にこうして出て来た以上、どうしても京都には帰らぬとのことだ。で、芳子は殆ど喧嘩をするまでに争つたが、矢張断として可かぬ。先生を頼りにして出京したのではあるが、そう聞けば、なるほど御尤である。監督上都合の悪いというのもよく解りました。けれど今更帰れませぬから、自分で如何ようにしても自活の道を求めて目的地に進むより他はないとまで言つたそつだ。時雄は不快を感じた。

時雄は一時は勝手にしろと思つた。放っておけとも思つた。けれど圈内の一員たるかれにどうして全く風馬牛たることを得ようぞ。芳子はその後二三日訪問した形跡もなく、学校の時間には正確に帰って来るが、学校に行くと呼して恋人の許に寄りませぬかと思うと、胸は疑惑と嫉妬とに燃えた。

時雄は懊悩した。その心は日に幾遍となく変つた。あ

る時は全く犠牲になつて二人の爲めに尽そうと思つた。
ある時はこの一伍一什を国に報じて一挙に破壊して了
うかと思つた。けれどこの何れをも敢てすることの出来
ぬのが今の心の状態であつた。

細君が、ふと、時雄に耳語した。

「あなた、二階では、これよ」と針で着物を縫う真似を
して、小声で、「きつと……上げるんでしよう。紺緋の書
生羽織！ 白い木綿の長い紐も買ってありますよ」

「本当か？」

「え」

と細君は笑つた。

時雄は笑うどころではなかつた。

芳子が今日は先生少し遅くなりますからと顔を赧くし
て言つた。「彼処に行くのか」と問うと、「いいえ！ 一寸
友達の処に用があつて寄つて来ますから」

その夕暮、時雄は思切つて、芳子の恋人の下宿を訪問
した。

「まことに、先生にはよう申訳がありまえんのやけれど
……」長い演説調の雄弁で、形式的の申訳をした後、田
中という中脊の、少し肥えた、色の白い男が祈禱をする
時のような眼色をして、さも同情を求めると言つた。

時雄は熱していた。「然し、君、解つたら、そうしたら
好いじゃありませんか、僕は君等の将来を思つて言うの
です。芳子は僕の弟子です。僕の責任として、芳子に廢
学させるには忍びん。君が東京にどうしてもいると言う
なら、芳子を国に帰すか、この関係を父母に打明けて許
可を乞うか、二つの中一つを選ばんければならん。君は

君の愛する女を君の爲めに山の中に埋もらせるほどエゴイチックな人間じゃありますまい。君は宗教に従事することが今度の事件の爲めに厭いやになつたと謂いうが、それは一種の考くえで、君は忍んで、京都に居りさえすれば、万事円満に、二人の間柄も将来希望があるのですから」

「よう解とけております……」

「けれど出来んですか」

「どうも済みませんけど……制服も帽子も売ってしまつたで、今更歸るにも歸れまえんという次第で……」

「それじゃ芳子を国に歸すですか」

かれは黙もっている。

「国に言いつて遣やりましようか」

矢張黙もっていた。

「私の東京に参まりましたのは、そういうことには寧むろ関係かんしない積つりでおます。別段こちらに居ゐりまして、二人の間にはどうという……」

「それは君はそう言うでしょう。けれど、それでは私は監督は出来ん。恋はいつ惑わ溺でするかも解らん」

「私はそないなことは無ないつもりですけどナ」

「誓ちかい得えるですか」

「静かに、勉強して行いかれさえすれアナ、そないなことありませんけどナ」

「だから困こるのです」

こういう会話——要領を得ない会話を繰返して長く相対した。時雄は将来の希望という点、男子の犠牲という点、事件の進行という点からいろいろさまさまに帰国を勧めた。時雄の眼まなこに映じた田中秀夫は、想像したような一箇秀麗な丈夫じやうふでもなく天才肌の人とも見えなかつた。

麴町三番町通の安旅人宿、三方壁でしきられた暑い室に初めて相對した時、先ずかれの身に迫ったのは、基督教に養われた、いやに取澄ました、年に似合わぬ老成な、厭な不愉快な態度であった。京都訛の言葉、色の白い顔、やさしいところはいくらかはあるが、多い青年の中からこうした男を特に選んだ芳子の気が知れなかった。殊に時雄が最も厭に感じたのは、天真流露という率直なところが微塵もなく、自己の罪悪にも弱点にも種々の理由を強いてつけて、これを弁解しようとする形式的態度であった。とは言え、実を言えば、時雄の激しい頭脳には、これがすぐ直覺的に明かに映ったと云うではなく、座敷の隅に置かれた小さい旅靴や憐れにもしておたれた白地の浴衣などを見ると、青年空想の昔が思い出されて、こうした恋の爲め、煩悶もし、懊惱もしているかと思つて、憐憫の情も起らぬではなかった。

この暑い一室に相對して、跌坐をもかかず、二人は尠くとも一時間以上語った。話は遂に要領を得なかった。「先ず今一度考え直して見給え」くらいが最後で、時雄は別れて帰途に就いた。

何だか馬鹿らしいような気がした。愚なる行為をしたように感じられて、自らその身を嘲笑した。心にもないお世辞を言い、自分の胸の底の秘密を蔽う爲めには、二人の恋の温情なる保護者となろうとまで言ったことを思い出した。安翻譯の仕事を周旋して貰う爲め、某氏に紹介の労を執ろうと言ったことをも思い出した。そして自分ながら自分の意気地なく好人物なのを罵った。

時雄は幾度か考えた。寧ろ国に報知して遣らうか、と。けれどそれを報知するに、どういふ態度を以てしようか

というのが大問題であった。二人の恋の關鍵かぎを自ら握っていると言わずにだけそれだけ時雄は責任を重く感じた。その身の不当の嫉妬、不当の恋情の為めに、その愛する女の熱烈なる恋を犠牲にするには忍びぬと共に、自ら言つた「温情なる保護者」として、道德家の如く身を処するにも堪えなかつた。また一方にはこの事が国に知れて芳子が父母の為めに伴われて帰国するようになるのを恐れた。

芳子が時雄の書齋に来て、頭を垂れ、声を低うして、その希望を述べたのはその翌日の夜であつた。如何いかに説いても男は帰らぬ。さりとして国へ報知すれば、父母の許さぬのは知れたこと、時宜じぎに由よれば忽たちまち迎いに來ぬとも限らぬ。男も折角あして出て來たことでもあり二人の間も世の中の男女の恋のように浅く思い浅く恋した訳でもないから、決して汚れた行為などはなく、惑溺するようなことは誓つて為ない。文学は難むずかしい道、小説を書いて一家を成そうとするのは田中のようなものには出來ぬかも知れねど、同じく將來を進むなら、共に好む道に携たづねたい。どうか暫しばくこのままにして東京に置いてくれとの頼み。時雄はこの余儀なき頼みをすげなく却しりぞけることは出來なかつた。時雄は京都嵯峨さかに於おける女の行為にその節操を疑つてはいるが、一方には又その弁解をも信じて、この若い二人の間にはまだそんなことはあるまいと思つていた。自分の青年の経験に照らしてみても、神聖なる靈の恋は成立つても肉の恋は決してそう容易に実行されるものではない。で、時雄は惑溺せぬものならば、暫くこのままにしておいて好いと言つて、そして縷々るるとして靈の恋愛、肉の恋愛、恋愛と人生との關係、教育

ある新しい女の当まはに守るべきことなどに就いて、切實にかつ真摯しんしに教訓した。古人が女子の節操を誠しましめたのは社会道德の制裁よりは、寧むしろ女子の独立を保護する為であるということ、一度肉を男子に許せば女子の自由が全く破れるということ、西洋の女子はよくこの間の消息を解しているから、男女交際をして不都合がないということ、日本の新しい婦人も是非ともそうならなければならぬということなど主おもなる教訓の題目であったが、殊に新派の女子ということに就いて痛切に語った。

芳子は低頭うつむいてきいていた。

時雄は興に乗じて、

「そして一体、どうして生活しようというのです？」

「少しは準備もして来たんでしよう、一月位は好いでし
ようけれど……」

「何か旨うまい口でもあると好いけれど」と時雄は言った。

「実は先生に御おす縫り申して、誰も知ってるものがないの
に出て参りましたのですから、大層失望しましたのです
けれど」

「だッて余り突飛だ。一昨日逢ってもそう思ったが、ど
うもあれでも困るね」

と時雄は笑った。

「どうか又御心配下さるよう……この上御心配かけて
は申あ訳がありませんけれど」と芳子は縫あるようにして顔
を赧あめた。

「心配せん方が好い、どうかなるよ」

芳子が出て行った後、時雄は急に険けわしい難かしい顔に
成った。「自分……自分に……自分に、この恋の世話が出来るだろ
うか」と独ひとりで胸に反問した。「若い鳥は若い鳥でなくて

は駄目だ。自分等はもうこの若い鳥を引く美しい羽を持っていない」こう思うと、言うに言われぬ寂しさがひしと胸を襲った。「妻と子——家庭の快樂だと人は言うが、それに何の意味がある。子供の為めに生存している妻は生存の意味があるうが、妻を子に奪われ、子を妻に奪われた夫はどうして寂寞せきばくたらざるを得るか」時雄はじつと洋燈ランツを見た。

机の上にはモウパッサンの「死よりも強し」が開かれてあった。

二三日経たって後、時雄は例刻に社から帰って火鉢ひばちの前に坐ると、細君が小声で、

「今日来てよ」

「誰が」

「二階の……そら芳子さんの好きな人」

細君は笑った。

「そうか……」

「今日一時頃、御免なさいと玄関に来た人があるですか、私が出て見ると、顔の丸い、緋かすりの羽織を着た、白縞しろしまの袴はかまを穿はいた書生さんが居るじゃありませんか。また、原稿でも持って来た書生さんかと思ったら、横山さんは此方こちらにおいでですかと言うじゃありませんか。はて、不思議だと思っただけれど、名を聞きますと、田中……。はア、それでその人だナと思っただですよ。厭な人ねえ、あんな人を、あんな書生さんを恋人にしないたって、いくらも好いのがあるでしょうに。芳子さんは余程物好きね。あれじゃとても望みはありませんよ」

「それでどうした？」

「芳子さんは嬉しいんでしょうけど、何だか極きまりが悪わるそうでしたよ。私がお茶を持って行って上げると、芳子さんは机の前に坐っている。その前にその人が居て、今まで何か話していたのを急に止して黙もくってしまっまた。私は変だからすぐ下りて来たですがね、……何だか変ね、……今の若い人はよくああいうことが出来てね、私のその頃には男に見られるのすら恥かしくって恥かしくって為方しかたがなかったものですよに……」

「時代が違うからナ」

「いくら時代が違っても、余り新派過ぎると思おもいましたよ。墮落書生と同じですからね。それやうわべが似ているだけで、心はそんなことはないでしょうけれど、何だか変ですよ」

「そんなことはどうでも好すい。それでどうした？」

「お鶴（下女）が行って上げると言うのに、好すいと言いって、御自分ごじぶんで出かけて、餅菓子もちがしと焼芋やきいもを買かって来て、御馳走ごちそうしてよ。……お鶴も笑わってましたよ。お湯をさしに上ると、二人でお旨いしそうにおさつを食べているところでしたッて……」

時雄も笑わわざるを得えなかった。

細君は猶なほ語り続ついだ。「そして随分長く高い声で話してましたよ。議論ぎろんみたいなことも言いって、芳子さんもなかなか負まけない様子ようすでした」

「そしていつ帰かえった？」

「もう少し以前さつき」

「芳子は居いるか」

「いいえ、路みちが分わからないから、一緒いっしょに其処そこまで送おくって行って来るッて出懸でかけて行いったんですよ」

時雄は顔を曇らせた。

夕飯を食っているのと、裏口から芳子が帰って来た。急いで走って来たと覚しく、せいせい息を切っている。

「何処まで行らした？」

と細君が問うと、

「神楽坂まで」と答えたが、いつもする「おかえりなさいまし」を時雄に向かって言って、そのままはたばたと二階へ上った。すぐ下りて来るかと思うに、なかなか下りて来ない。「芳子さん、芳子さん」と三度ほど細君が呼ぶと、「はアーい」という長い返事が聞えて、矢張り下りて来ない。お鶴が迎いに行つて漸く二階を下りて来たが、準備した夕飯の膳を他所に、柱に近く、斜に坐った。

「御飯は？」

「もう食べたくないの、腹が一杯で」

「余りおさつを召上った故でしょう」

「あら、まあ、酷い奥さん。いいわ、奥さん」

と睨む真似をする。

細君は笑つて、

「芳子さん、何だか変ね」

「何故？」と長く引張る。

「何故でも無いわ」

「いいことよ、奥さん」

と又睨んだ。

時雄は黙つてこの嬌態に対していた。胸の騒ぐのは無論である。不快の情はひしと押し寄せて来た。芳子はちらと時雄の顔を覗いたが、その不機嫌なのが一目で解つた。で、すぐ態度を改めて、

「先生、今日田中が参りましてね」

「そうだってね」

「お目にかかってお礼を申上げなければならんのですけれども、又改めて上がりますからッて……よろしく申上げて……」

「そうか」

と言ったが、そのままふいと立って書斎に入ってしまった。

その恋人が東京に居ては、仮令自分が芳子をその二階に置いて監督しても、時雄は心を安んずる暇はなかった。二人の相逢うことを妨げることは絶対不可能である。手紙は無論差留めることは出来ぬし、「今日ちよっと田中に寄って参りますから、一時間遅くなります」と公然と断って行くのをどうこう言う訳には行かなかった。またその男が訪問して来るのを非常に不快に思うけれど、今更それを謝絶することも出来なかった。時雄はいつの間にか、この二人からその恋に対しての「温情の保護者」として認められて了った。

時雄は常に苛々いらいらしていた。書かなければならぬ原稿が幾種もある。書肆しよしからも催促される。金も欲しい。けれどもどうしても筆を執って文を綴つづるような沈着おちついた心の状態にはなれなかった。強しいて試みてみるものがあっても、考が纏まとまらない。本を読んでも二頁ぺいも続けて読む気にならない。二人の恋の温かさを見る度に、胸むねを燃もやして、罪もない細君に当り散ちらして酒を飲んだ。晚餐ばんさんの菜が気に入らぬと云って、御膳おぜんを蹴け飛ばした。夜は十二時過に酔って帰って来ることもあった。芳子はこの乱暴な不調子な時雄の行為に尠すくなからず心を痛めて、「私がいろいろ御心配

を懸けるもんですからね、私が悪いんですよ」と詫びるように細君に言った。芳子はなるたけ手紙の往復を人に見せぬようにし、訪問も三度に一度は学校を休んでこっそり行くようにした。時雄はそれに気が附いて一層懊惱の度を増した。

野は秋も暮れて木枯の風が立った。裏の森の銀杏樹も黄葉して夕の空を美しく彩った。垣根道には反かえった落葉ががさがさと転がって行く。鴉の鳴音がけたたましく聞える。若い二人の恋が愈々「#」の字点、「1-2-22」人目に余るようになったのはこの頃であった。時雄は監督上見るに見かねて、芳子を説教め、この一伍一什を故郷の父母に報せしめた。そして時雄もこの恋に關しての長い手紙を芳子の父に寄せた。この場合にも時雄は芳子の感謝の情を十分に贏ち得るように勉めた。時雄は心を欺いて、——悲壯なる犠牲と称して、この「恋の温情なる保護者」となった。

備中の山中から数通の手紙が来た。

七

その翌年の一月には、時雄は地理の用事で、上武の境なる利根河畔に出張していた。彼は昨年 of 年末からこの地に来ているので、家のこと——芳子のこと、殊に心配になる。さりとて公務を如何ともすることが出来なかった。正月になって二日にちよつと帰京したが、その時は次男が齒を病んで、妻と芳子とが頻りにそれを介抱していた。妻に聞くと、芳子の恋は更に惑溺の度を加えた様子。大晦日の晩に、田中が生活のたつきを得ず、下宿に

帰ることも出来ずに、終夜運転の電車に一夜を過したということ、余り頻繁ひんぱんに二人が往来するので、それをそれとなしに注意して芳子と口争いをしたということ、その他種々のことを聞いた。困ったことだと思った。一晚泊って再び利根の河畔に戻った。

今は五日の夜であった。茫ぼうとした空に月が暈かさを帯びて、その光が川の中央にきらきらと金を砕いていた。時雄は机の上に一通の封書を展ひらいて、深くその事を考えていた。その手紙は今少し前、旅館の下女が置いて行った芳子の筆である。

先生、

まことに、申訳が御座いませぬ。先生の同情ある御恩は決して一生経たっても忘るることではなく、今もそのお心を思うと、涙が滴こぼるるのです。

父母はあの通りです。先生があのように仰おつしゃって下さっても、旧風むかしふうの頑固かたくなで、私共の心を汲くんでくれようとも致しませぬ、泣いて訴えましたけれど、許してくれませぬ。母の手紙を見れば泣かずにはおられませぬけれど、少しは私の心も汲んでくれないと思ひます。恋とはこう苦しいものかと今つくづく思ひ当りました。先生、私は決心致しました。聖書にも女は親に離れて夫に従うと御座います通り、私は田中に従おうと存じます。

田中いまは未だに生活のたつきを得ませぬ、準備した金は既に尽き、昨年こぞの暮れは、うらぶれの悲しい生活を送ったので御座います。私はもう見ているに忍びませぬ。国からの補助を受けませんが、私等は私等二人で出来るまでこの世に生きてみようと思ひます。先生に御

心配を懸けるのは、まことに済みません。監督上、御心配なさるのも御尤もです。けれど折角先生があのように私等の為めに国の父母をお説き下すったにも係らず、父母は唯無意味に怒ってばかりいて、取合ってくれませんのは、余りと申せば無慈悲です、勘当されても為方が御座いません。墮落々と申して、殆ど齒せぬばかりに申しておりますが、私達の恋はそんなに不真面目なもので御座いましょうか。それに、家の門地々と申しますが、私は恋を父母の都合によって致すような旧式の女でないことは先生もお許し下さるでしょう。

先生、

私は決心致しました。昨日上野図書館で女の見習生が入用だという広告がありましたから、応じてみようと思います。二人して一生懸命に働きましたら、まさかに餓えるようなことも御座いますまい。先生のお家にこうして居ますればこそ、先生にも奥様にも御心配を懸けて済まぬので御座います。どうか先生、私の決心をお許し下さい。

「#地から2字上げ」芳子

「#ここから4字下げ」

先生 おんもとへ

「#ここで字下げ終わり」

恋の力は遂に二人を深い惑溺の淵に沈めたのである。時雄はもうこうしてはおかれぬと思った。時雄が芳子の歡心を得る為めに取った「温情の保護者」としての態度を考えた。備中の父親に寄せた手紙、その手紙には、極力二人の恋を庇保して、どうしてもこの恋を許して貰わ

ねばならぬという主旨であった。時雄は父母の到底これを承知せぬことを知っていた。寧ろ父母の極力反対することを希望していた。父母は果して極力反対して来た。言うことを聞かぬなら勘当するとまで言ってきた。二人はまさに受くべき恋の報酬を受けた。時雄は芳子のために飽まで弁明し、汚れた目的の為に行われたる恋でないことを言い、父母の一人、是非出京してこの問題を解決して貰いたいと言いつつ送った。けれど故郷の父母は、監督なる時雄がそういう主張であるのと、到底その口から許可することが出来ぬのとで、上京しても無駄であると云って出て来なかった。

時雄は今、芳子の手紙に対して考えた。

二人の状態は最早一刻も猶予すべからざるものとなっている。時雄の監督を離れて二人一緒に暮りたいという大胆な言葉、その言葉の中には警戒すべき分子の多いのを思った。いや、既に一步を進めているかも知れぬと思った。又一面にはこれほどそのために尽力しているのに、その好意を無にして、こういう決心をするとは義理知らず、情知らず、勝手にするが好いとまで激した。

時雄は胸の轟きを静める為め、月朧なる利根川の堤の上を散歩した。月が暈を帯びた夜は冬ながらやや暖かく、土手下の家々の窓には平和な燈火が静かに輝いていた。川の上には薄い靄が懸って、おりおり通る船の艦の音がギイと聞える。下流でおいと渡しを呼ぶものがある。舟橋を渡る車の音がとどろに響いてそして又一時静かになる。時雄は土手を歩きながら種々のことを考えた。芳子のことよりは一層痛切に自己の家庭のさびしさということが胸を往来した。三十五六歳の男女の最も味うべき

生活の苦痛、事業に対する煩惱、性慾より起る不満足等が凄じい力でその胸を圧迫した。芳子はかれの爲めに平凡なる生活の花でもあり又糧でもあった。芳子の美しい力に由って、荒野の如き胸に花咲き、錆び果てた鐘は再び鳴ろうとした。芳子の爲めに、復活の活気は新しく鼓吹された。であるのに再び寂寞荒涼たる以前の平凡なる生活にかえらなければならぬとは……。不平よりも、嫉妬よりも、熱い熱い涙がかれの頬を伝った。

かれは真面目に芳子の恋とその一生とを考えた。二人同棲して後の倦怠、疲労、冷酷を自己の経験に照らしてみた。そして一たび男子に身を任せて後の女子の境遇の憐むべきを思い遣った。自然の最奥に秘める暗黒なる力に対する厭世の情は今彼の胸を簾々として襲った。

真面目なる解決を施さなければならぬという氣になった。今までの自分の行為の甚だ不自然で不真面目であるのに思いついた。時雄はその夜、備中の山中にある芳子の父母に寄する手紙を熱心に書いた。芳子の手紙をその中に巻込んで、二人の近況を詳しく記し、最後に、

父たる貴下と師たる小生と当事者たる二人と相對して、此の問題を真面目に議すべき時節到来せりと存候、貴下は父としての主張あるべく、芳子は芳子としての自由あるべく、小生また師としての意見有之候、御多忙の際には有之候えども、是非々々御出京下され度、幾重にも希望仕候。

と書いて筆を結んだ。封筒に収めて備中国新見町横山兵蔵様と書いて、傍に置いて、じっとそれを見入った。この一通が運命の手だと思った。思いきって婢を呼んで渡した。

一日二日、時雄はその手紙の備中の山中に運ばれて行くさまを想像した。四面山で囲まれた小さな田舎町、その中央にある大きな白壁造、そこに郵便脚夫が配達すると、店に居た男がそれを奥へ持って行く。丈の高い、髯のある主人がそれを読む——運命の力は一刻毎に迫って来た。

八

十日に時雄は東京に帰った。

その翌日、備中から返事があって、二三日の中に父親が出発すると報じて来た。

芳子も田中も今の際、寧ろそれを希望しているらしく、別にこれと云って驚いた様子も無かった。

父親が東京に着いて、先ず京橋に宿を取って、牛込の時雄の宅を訪問したのは十六日の午前十一時頃であった。丁度日曜で、時雄は宅に居た。父親はフロックコートを着て、中高帽を冠って、長途の旅行に疲れたという風であった。

芳子はその日医師へ行っていた。三日程前から風邪を引いて、熱が少しあった。頭痛がすると言っていた。間もなく帰って来たが、裏口から何の気なしに入ると、細君が、「芳子さん、芳子さん、大変よ、お父さんが来てよ」「お父さん」

と芳子もさすがにはっとした。

そのまま二階に上ったが下りて来ない。

奥で、「芳子は？」と呼ぶので、細君が下から呼んでみたが返事がない。登って行って見ると、芳子は机の上に

打伏うしぶしている。

「芳子さん」

返事が無い。

傍に行つて又呼ぶと、芳子は青い神経性の顔を擡もたげた。

「奥で呼んでいますよ」

「でもね、奥さん、私はどうして父に逢あわれるでしょう」
泣いているのだ。

「だって、父様に久し振じゃありませんか。どうせ逢わないわけには行かんのですもの。何アにそんな心配をすることはありませんよ、大丈夫ですよ」

「だって、奥さん」

「本当に大丈夫ですから、しっかりなさいよ、よくあなたを父様にお話しなさいよ。本当に大丈夫ですよ」

芳子は遂に父親の前に出た。鬚ひげ多く、威厳のある中に何処どことなく優しいところのある懐なつかしい顔を見ると、芳子は涙の漲みなぎるのを禁とどめ得なかつた。旧式な頑固がんこな爺おやじ、若いものの心などの解らぬ爺、それでもこの父は優しい父であつた。母親は万事に気が附いて、よく面倒を見てくれたけれど、何故か芳子には母よりもこの父の方が好かつた。その身の今の窮迫を訴え、泣いてこの恋の真面目なのを訴えたら父親もよもや動かされぬことはあるまいと思つた。

「芳子、暫ひまくじヤツたのう……体は丈夫かの？」

「お父さま……」芳子は後を言い得なかつた。

「今度来ます時に……」と父親は傍に坐っている時雄に語つた。「佐野と御殿場でしたかナ、汽車に故障がありましてナ、二時間ほど待ちました。機関が破裂しましてナ」
「それは……」

「全速力で進行している中に、凄じい音すさまがしたと思いましたけえ、汽車が夥おびただしく傾斜してだらだらと逆行しまし
てナ、何事かと思いましたが。機関が破裂して火夫が二人
とか即死した……」

「それは危険でしたナ」

「沼津から機関車を持って来てつけるまで二時間も待ち
ましたけえ、その間もナ、思ひまして……これの為に
こうして東京に来ていた途中、もしもの事があつたら、
芳（と今度は娘の方を見て）お前も兄弟に申訳が無かる
うと思つたじゃわ」

芳子は頭を垂れて黙っていた。

「それは危険でした。それでも別にお怪我もなくって結
構でした」

「え、まア」

父親と時雄は暫くその機関破裂のことに就いて語り合
つた。不凶ふと、芳子は、

「お父様、家では皆な変ることは御座いません？」

「うむ、皆な達者じゃ」

「母さんも……」

「うむ、今度も私が忙しいけえナ、母に来て貰うように
言うてじゃつたが、矢張、私の方が好いじゃろうと思つ
て……」

「兄さんも御達者？」

「うむ、あれもこの頃は少し落附いている」

かれこれする中に、午飯ひるめしの膳が出た。芳子は自分の室
に戻った。食事を終つて、茶を飲みながら、時雄は前か
らのその問題を語り続ついだ。

「で、貴方あなたはどうしても不賛成？」

「賛成しようにもしまいにも、まだ問題になりおりませんけえ。今、仮に許して、二人一緒にするに致しても、男が二十二で、同志社の三年生では……」

「それは、そうですが、人物を御覧の上、将来の約束でも……」

「いや、約束などと、そんなことは致しますまい。私は人物を見たわけでありませんけえ、よく知りませんけどナ、女学生の上京の途次を要して途中に泊らせたり、年来の恩ある神戸教会の恩人を一朝にして捨て去ったりするような男ですけえ、とても話にはならぬと思いますじや。この間、芳から母へよこした手紙に、その男が苦しんでおるじゃで、どうか御察し下すって、私の学費を少くしても好いから、早稲田わせだに通う位の金を出してくれと書いてありましたげな、何かそういう計画で芳がたまされておるんではないですかな」

「そんなことは無いでしょうと思うですが……」

「どうも怪しいことがあるです。芳子と約束が出来て、すぐ宗教が厭いやになって文学が好きになったと言うのも可笑おかしし、その後をすぐ追って出て来て、貴方などの御説諭も聞かずに、衣食に苦しんでまでもこの東京に居るなども意味がありそうですわい」

「それは恋の惑溺であるかも知れませんが善意に解釈することも出来ますが」

「それにしても許可するのせぬのとは問題になりませんけえ、結婚の約束は大きなことでして……。それにはその者の身分も調べて、此方こっちの身分との釣合も考えなければなりませんし、血統を調べなければなりません。それに人物が第一です。貴方の御覧になるところでは、秀才

だとか仰おっしゃってですが……」

「いや、そう言うわけでも無かったです」

「一体、人物はどういう……」

「それは却かえって母さんなどが御存かえじだと言うことですが」

「何アに、須磨すまの日曜学校で一二度会ったことがある位、妻もよく知らんそうですけえ。何でも神戸では多少秀才とか何とか言われた男で、芳は女学院に居る頃から知っておるのでしようがナ。説教や祈きと禱うなどを遣やらせるると、大人も及ばぬような巧いことを遣りおったそうですけえ」

「それで話が演説調になるのだ、形式的になるのだ、あの厭な上目を使うのは、祈きと禱うをする時の表情だ」と時雄は心の中に合点がてんした。あの厭な表情で若い女を迷わせるのだなと続いて思って厭な気がした。

「それにしても、結局はどうしましょう？ 芳子さんを伴つれてお帰りになりますか」

「されば……なるだけは連れて帰りたくないと思います。村に娘を伴つれて突然帰ると、どうも際立きわって面白くありません。私も妻も種々村の慈善事業や名誉職などを遣やっておりますけえ、今度のことなどがぱっとしますと、非常に困る場合もあるです……。で、私は、貴方の仰おっしやる通り、出来得なべくば、男を元の京都に帰して、此処こゝ一二年、娘は猶なお世話になりたいと存じておりますじゃが……」

「それが好いですな」

と時雄は言った。

二人の間柄に就いての談話も一二あった。時雄は京都

嵯峨の事情、その以後の経過を話し、二人の間には神聖の靈の恋のみ成立っていて、汚い関係は無いであろうと言った。父親はそれを聴いて點頭きはしたが、「でもまあ、その方の関係もあるものとして見なければなりませんまい」と言った。

父親の胸には今更娘に就いての悔恨の情が多かった。田舎ものの虚栄心の為めに神戸女学院のような、ハイカラな学校に入れて、その寄宿舎生活を行わせたことや、娘の切なる希望を容れて小説を学ぶべく東京に出したことや、多病の為に言うがままにして余り検束を加えなかったことや、いろいろなことが簇々と胸に浮んだ。

一時間後にはわざわざ迎いに遣った田中がこの室に来ていた。芳子もその傍に庇髪を俛れて談話を聞いていた。父親の眼に映じた田中は元より気に入った人物ではなかった。その白縞の袴を着け、紺がすりの羽織を着た書生姿は、輕蔑の念と憎悪の念とをその胸に漲らしめた。その所有物を奪った憎むべき男という感は、曾つて時雄がその下宿でこの男を見た時の感と甚だよく似ていた。

田中は袴の襷を正して、しゃんと坐ったまま、多く二尺先位の畳をのみ見っていた。服従という態度よりも反抗という態度が歴々としていた。どうも少し固くなり過ぎて、芳子を自分の自由にする或る権利を持っているという風に見えていた。

談話は真面目にかつ烈しかった。父親はその破廉恥を敢て正面から責めはしないが、おりおり苦い皮肉をその言葉の中に交えた。初めは時雄が口を切ったが、中頃から重に父親と田中とが語った。父親は県会議員をした人だけあって、言葉の抑揚頓挫が中々巧みであった。演説

に慣れた田中も時々沈黙させられた。二人の恋の許可不許可も問題に上ったが、それは今研究すべき題目でないとして却^{しりぞ}けられ、当面の京都帰還問題が論ぜられた。

恋する二人——殊^{こと}に男に取っては、この分離は甚^{つら}だ辛いらしかった。男は宗教的資格を全く失ったということ、帰るべく家をも国をも持たぬということ、二三月来飄零^{ひょうれい}の結果漸^やく東京に前途の光明を認め始めたのに、それを捨てて去るに忍びぬということなぞを楯^{たて}として、頻りに帰国の不可能を主張した。

父親は懇々として説いた。

「今更京都に帰れないという、それは帰れないに違いない。けれど今の場合である。愛する女子ならその女子の為に犠牲になれぬということはあるまいじゃ。京都に帰れないから田舎に帰る。帰れば自分の目的が達せられぬというが、其処を言うのじゃ。其処を犠牲になっても好かろうと言うのじゃ」

田中は黙して下を向いた。容易に諾^{たく}しそうにも無い。先程から黙って聞いていた時雄は、男が余りに頑固なのに、急に声を励^{はげま}して、「君、僕は先程から聞いていたが、あれほどに言うお父さんの言葉が解らんですか。お父さんは、君の罪をも問わず、破廉恥をも問わず、将来もし縁があったら、この恋愛を承諾せぬではない。君もまだ年が若い、芳子さんも今修業最中である。だから二人は今暫くこの恋愛問題を未解決^{うち}の中にそのままにしておいて、そしてその行末を見ようと言うのが解らんですか。今の場合、二人はどうしても一緒には置かれぬ。何方^{どっち}かこの東京を去らなくってはならん。この東京を去るといふことに就いては、君が先ず去るのが至当^いだ。何故かと謂

えば、君は芳子の後を追うて来たのだから」

「よう解っております」と田中は答えた。「私が万事悪いのでございますから、私が一番に去らなければなりません。先生は今、この恋愛を承諾して下されぬではないと仰しゃったが、お父様の先程の御言葉では、まだ満足致されぬような訳でして……」

「どういう意味です」

と時雄は反問した。

「本当に約束せぬというのが不満だと言うのですじゃろう」と、父親は言葉を入れて、「けれど、これは先程もよく話した筈じゃけえ。今の場合、許可、不許可という事は出来ぬじゃ。独立することも出来ぬ修業中の身で、二人一緒にこの世の中に立って行こうと言やるは、どうも不信用じゃ。だから私は今三四年はお互に勉強するが好いじゃと思う。真面目ならば、こうまで言った話は解らんけりやならん。私が一時を瞞着して、芳を他に嫁けるとか言うのやなら、それは不満足じゃろう。けれど私は神に誓って言う、先生を前に置いて言う、三年は芳を私から進んで嫁にやるようなことはせんじゃ。人の世はエホバの思召次第、罪の多い人間はその力ある審判を待つより他に為方が無いけえ、私は芳は君に進ずるとまでは言うことは出来ん。今の心が許さんけえ、今度のことは、神の思召に適っていないと思うけえ。三年経って、神の思召に適うかどうか、それは今から予言は出来んが、君の心が、真実真面目で誠実であったなら、必ず神の思召に適うことと思うじゃ」

「あれほどお父さんが解っていらっしやる」と時雄は父親の言葉を受けて、「三年、君が為めに待つ。君を信用す

るに足りる三年の時日を君に与えると言われたのは、実にこの上ない恩恵めぐみでしょう。人の娘を誘惑やっするような奴には真面目に話をする必要がないといつて、このまま芳子をつれて帰られても、君は一言も恨むせきはないのですのに、三年待とう、君の真心の見えるまでは、芳子に他に嫁けるようなことはすまいと言う。実に恩恵ある言葉だ。許可すると言ったより一層恩義が深い。君はこれが解らんですか」

田中は低頭うつむいて顔をしかめると思ったら、涙がはらはらとその頬ほおを伝った。

一座は水を打ったように静かになった。

田中は溢あふれ出いずる涙を手の拳こぶしで拭ぬぐった。時雄は今ぞ時と、

「どうです、返事を為したま給え」

「私などはどうなっても好うおます。田舎に埋れても構わんどす！」

また涙を拭った。

「それではいかん。そう反抗的に言っただって為方がない。腹の底を打明けて、互に不満足のないようにしようとする為めのこの会合です。君は違たって、田舎に帰るのが厭いやだとならば、芳子を国に帰すばかりです」

「二人一緒に東京に居ることは出来んのですか？」

「それは出来ん。監督上出来ん。二人の将来の為めにも出来ん」

「それでは田舎に埋れてもようおます！」

「いいえ、私が帰ります」と芳子も涙に声を震わして、

「私は女……女です……貴方さえ成功して下されば、私は田舎に埋れても構やしません、私が帰ります」

一座はまた沈黙に落ちた。

暫くしてから、時雄は調子を改めて、

「それにしても、君はどうして京都に帰れんです。神戸の恩人に一伍一什を話して、今までの不心得を謝して、同志社に戻ったら好いじゃありませんか。芳子さんが文学志願だから、君も文学家にならんければならんというようなことはない。宗教家として、神学者として、牧師として大に立ったなら好いでしよう」

「宗教家にはもうとてもようになりません。人に対して教を説くような豪い人間ではないでおますで。……それに、残念ですのは、三月の間苦勞しまして、実は漸くある親友の世話で、衣食の道が開けましたで、……田舎に埋れるには忍びまへんで」

三人は猶語った。話は遂に一小段落を告げた。田中は今夜親友に相談して、明日か明後日までに確乎たる返事を齎らそうと言って、一先ず帰った。時計はもう午後四時、冬の日は暮近く、今まで室の一隅に照っていた日影もいつか消えて了った。

一室は父親と時雄の二人になった。

「どうも煮えきらない男ですわい」と父親はそれとなく言った。

「どうも形式的で、甚だ要領を得んです。もう少し打明けて、ざっくばらんに話してくれれば好いですけれど……」

「どうも中国の人間はそうは行かんですけえ、人物が小さくって、小細工で、すぐ人の股を潜ろうとするですわい。関東から東北の人はまるで違いますがナア。悪いの

は悪い、好いのは好いと、真情を吐露して了うけえ、好いですけどもナ。どうもいかん。小細工で、小理窟で、めそめそ泣きおった……」

「どうもそういうところがありますナ」

「見ていさっしやい、明日きつと快諾しやあせんけえ、何のかのと理窟をつけて、帰るまいとするけえ」

時雄の胸に、ふと二人の關係に就いての疑惑が起った。男の烈しい主張と芳子を己が所有とする権利があるような態度とは、時雄にこの疑惑を起さしむるの動機となつたのである。

「で、二人の間の關係をどう御觀察なすつたです」

時雄は父親に問うた。

「そうですね。關係があると思わんけりやなりますまい」
「今の際、確めておく必要があると思うですが、芳子さんに、嵯峨行の弁解をさせましようか。今度の恋は嵯峨行の後に始めて感じたことだと言うてましたから、その証拠になる手紙があるでしょうから」

「まア、其処までせんでも……」

父親は關係を信じつつもその事実となるのを恐れるらしい。

運悪く其処に芳子は茶を運んで来た。

時雄は呼留めて、その証拠になる手紙があるだろう、その身の潔白を証する為めに、その前後の手紙を見せ給えと迫った。

これを聞いた芳子の顔は俄かに赧くなつた。さも困つたという風が歴々として顔と態度とに顯われた。

「あの頃の手紙はこの間皆な焼いて了いましたから」その声は低かつた。

「焼いた？」

「ええ」

芳子は顔を俛たれた。

「焼いた？ そんなことは無いでしょう」

芳子の顔は愈よ※「#二の字点、1-2-22」□こまくなった。

時雄は激さざるを得なかった。事實は恐しい力でかれの胸を刺した。

時雄は立って厠かわやに行った。胸は苛いら々らして、頭脳あたまは眩惑げんわくするよう感じた。欺あざかれたという念が烈つしく心頭こころを衝ついて起った。厠を出ると、其処そこに——障子の外に、芳子はおどおどした様子で立っている。

「先生——本当に、私は焼いて了ったのですから」

「うそをお言いなさい」と、時雄は叱しかるように言って、障子を烈しく閉めて室内に入った。

九

父親は夕飯の馳走ちそうになって旅宿に帰った。時雄のその夜の煩悶はんもんは非常であった。欺あざかれたと思うと、業ごうが煮えて為方がない。否、芳子の霊と肉——その全部を一書生に奪われながら、とにかくその恋に就いて真面目まじめに尽したかと思うと腹が立つ。その位なら、——あの男に身を任せていた位なら、何もその処女の節操を尊ぶには当らなかつた。自分も大胆に手を出して、性慾の満足を買えば好かつた。こう思うと、今まで上天の境まじに置いた美しい芳子は、売女ばいじょか何ぞのようように思われて、その体は愚か、美しい態度も表情も卑しむ気になつた。で、その夜は悶もだえ悶もだえて殆ど眠ほとんられなかつた。様々の感情が黒雲のように

胸を通った。その胸に手を当てて時雄は考えた。いっそうしてくれようかと思うた。どうせ、男に身を任せて汚れているのだ。このままこうして、男を京都に帰して、その弱点を利用して、自分の自由にしようかと思った。と、種々なことが頭脳に浮ぶ。芳子はその二階に泊って寝ていた時、もし自分がこっそりその二階に登って行って、遣瀨なき恋を語ったらどうであろう。危座して自分を諫めるかも知れぬ。声を立てて人を呼ぶかも知れぬ。それとも又せつない自分の情を汲んで犠牲になってくれるかも知れぬ。さて犠牲になったとして、翌朝はどうであろう、明かな日光を見ては、さすがに顔を合せるにも忍びぬに相違ない。日長けるまで、朝飯をも食わずに寝ているに相違ない。その時、モウパッサンの「父」という短篇を思い出した。ことに少女が男に身を任せて後烈しく泣いたことの書いてあるのを痛切に感じたが、それを又今思い出した。かと思うと、この暗い想像に抵抗する力が他の一方から出て、盛にそれと争った。で、煩悶又煩悶、懊惱また懊惱、寝返を幾度となく打って二時、三時の時計の音をも聞いた。

芳子も煩悶したに相違なかった。朝起きた時は蒼い顔を為っていた。朝飯をも一椀で止した。なるだけ時雄の顔に逢うのを避けている様子であった。芳子の煩悶はその秘密を知られたというよりも、それを隠しておいた非を悟った煩悶であつたらしい。午後にちよつと出て来たいと言つたが、社へも行かずに家に居た時雄はそれを許さなかつた。一日はかくて過ぎた。田中から何等の返事もなかつた。

芳子は午飯も夕飯も食べたくないとて食わない。陰鬱

な気が一家に充ちた。細君は夫の機嫌の悪いのと、芳子の煩悶しているのに胸を痛めて、どうしたことかと思つた。昨日の話の模様では、万事円満に収まりそうであつたのに……。細君は一椀なりと召上らなくては、お腹が空いて為方があるまいと、それを侷めに二階へ行つた。時雄はわびしい薄暮を苦い顔をして酒を飲んでゐた。やがて細君が下りて来た。どうしてゐたと時雄は聞くと、薄暗い室に洋燈も点けず、書き懸けた手紙を机に置いて打伏してゐたとの話。手紙？ 誰に遣る手紙？ 時雄は激した。そんな手紙を書いたって駄目だと宣告しようと思つて、足音高く二階に上つた。

「先生、後生ですから」

と祈るような声が聞えた。机の上に打伏したままである。「先生、後生ですから、もう、少し待って下さい。手紙に書いて、さし上げますから」

時雄は二階を下りた。暫くして下女は細君に命ぜられて、二階に洋燈を点けに行つたが、下りて来る時、一通の手紙を持って来て、時雄に渡した。

時雄は渴したる心を以て読んだ。

先生、

私は墮落女学生です。私は先生の御厚意を利用して、先生を欺きました。その罪はいくらお詫びしても許されませぬほど大きいと思います。先生、どうか弱いものと思つてお憐み下さい。先生に教えて頂いた新しい明治の女子としての務め、それを私は行つておりませんでした。矢張私は旧派の女、新しい思想を行う勇氣を持っておりませんでした。私は田中に相談しまして、どんなことがあつてもこの事ばかりは人に打明けまい。

過ぎたことは為方が無いが、これからは清浄な恋を続けようと約束したのです。けれど、先生、先生の御煩悶が皆な私の至らない為であると思ひますと、じつとしてはいられませぬ。今日は終日そのことで胸を痛めました。どうか先生、この憐れなる女をお憐み下さいまし。先生にお縋り申すより他、私には道が無いので御座います。

「#地から2字上げ」芳子

「#ここから4字下げ」

先生 おもと

「#ここで字下げ終わり」

時雄は今更に地の底にこの身を沈めらるるかと思った。手紙を持って立上った。その激した心には、芳子がこの懺悔を敢てした理由——総てを打明けて縋ろうとした態度を解釈する余裕が無かった。二階の階梯をけたたましく踏鳴らして上って、芳子の打伏している机の傍に巖然として坐った。

「こうなつては、もう為方がない。私はもうどうすることも出来ぬ。この手紙はあなたに返す、この事に就いては、誓って何人にも沈黙を守る。とにかく、あなたが師として私を信頼した態度は新しい日本の女として恥しくない。けれどこうなつては、あなたが国に帰るのが至当だ。今夜——これから直ぐ父様の処に行きましよう、そして一伍一什を話して、早速、国に帰るようにした方が好い」

で、飯を食い了るとすぐ、支度をして家を出た。芳子の胸にさまざまの不服、不平、悲哀が溢れたであろうが、しかも時雄の巖かなる命令に背くわけには行かなかつた。

市ヶ谷から電車に乗った。二人相並んで座を取ったが、しかも一語をも言葉を交えなかった。山下門で下りて、京橋の旅館に行くと、父親は都合よく在宅していた。一伍一什——父親は特に怒りもしなかった。唯同行して帰国するのをなるべく避けたいらしかったが、しかもそれより他に路は無かった。芳子は泣きも笑いもせず、唯、運命の奇しきに呆るといふ風であった。時雄は捨てた積りで芳子を自分に任せることは出来ぬかと言ったが、父親は当人が親を捨ててもというならばいざ知らず、普通の状態に於いては無論許そうとは為なかった。芳子もまた親を捨ててまでも、帰国を拒むほどの決心が附いておらなかった。で、時雄は芳子を父親に預けて帰宅した。

十

田中は翌朝時雄を訪うた。かれは大勢の既に定まったのを知らずに、己の事情の帰国に適せぬことを縷々として説こうとした。霊肉共に許した恋人の例として、いかにようにしても離れまいとするのである。

時雄の顔には得意の色が上った。

「いや、もうその問題は決着したです。芳子が一伍一什をすっかり話した。君等は僕を欺いていたということが解った。大変な神聖な恋でしたナ」

田中の顔は俄かに変った。羞恥の念と激昂の情と絶望の悶とがその胸を衝いた。かれは言うところを知らなかった。

「もう、止むを得んです」と時雄は言葉を続いで、「僕はこの恋に関係することが出来ません。いや、もう厭です。

芳子を父親の監督に移したです」

男は黙って坐っていた。蒼いその顔には肉の戦慄せんりつがありあり歴々と見えた。不図ふと、急に、辞儀をして、こうしてはいられぬという態度で、此処こゝを出て行った。

午前十時頃、父親は芳子を伴うて来た。愈※「#二の字点、1-2-22」今夜六時の神戸急行で帰国するので、大體の荷物は後から送って貰うとして、手廻もちの物だけ纏まとめて行こうというのであった。芳子は自分の二階に上って、そのまま荷物の整理に取懸った。

時雄の胸は激してはおったが、以前よりは軽快であった。二百余里の山川を隔てて、もうその美しい表情をも見ることが出来なくなると思うと、言うに言われぬ侘わびしさを感じずるが、その恋せる女を競争者の手から父親の手に移したことは尠すくなくとも愉快であった。で、時雄は父親と寧ろ快活に種々なる物語に耽ふけった。父親は田舎の紳士によく見るような書画道楽、雪舟、応挙、容斎の絵画、山陽、竹田、海屋、山茶の書を愛し、その名幅を無数に蔵していた。話は自らそれに移った。平凡なる書画物語は、この一室に一時栄えた。

田中が来て、時雄に逢いたいと言った。八畳と六畳との中じきりを閉めて、八畳で逢った。父親は六畳に居た。芳子は二階の一室に居た。

「御帰国になるんでしょうか」

「え、どうせ、帰るんでしょう」

「芳さんも一緒に」

「それはそうでしょう」

「何時いつですか、お話下されますまいか」

「どうも今の場合、お話することは出来ませんナ」

「それでは一寸でも……芳さんに逢わせて頂く訳には参りませうまいか」

「それは駄目でしょう」

「では、お父様は何方へお泊りですか、一寸番地をうかがいたいですが」

「それも僕には教えて好いか悪いか解らんですから」

取附く島がない。田中は黙って暫し坐っていたが、そのまま辞儀をして去った。

昼飯の膳がやがて八畳に並んだ。これがお別れだと云うので、細君は殊に注意して酒肴を揃えた。時雄も別れのしるしに、三人相並んで会食しようとしたのである。

けれど芳子はどうしても食べたくないという。細君が説勧めても来ない。時雄は自身二階に上った。

東の窓を一枚明けたばかり、暗い一室には本やら、雑誌やら、着物やら、帯やら、纏やら、行李やら、支那靴やらが足の踏み度も無い程に散らばっていて、塵埃の香が夥しく鼻を衝く中に、芳子は眼を泣腫して荷物の整理を為っていた。三年前、青春の希望湧くがごとき心を抱いて東京に出て来た時のさまに比べて、何等の悲惨、何等の暗黒であろう。すぐれた作品一つ得ず、こうして田舎に帰る運命かと思うと、堪らなく悲しくならずにはいられない。

「折角支度したから、食ったらどうです。もう暫くは一緒に飯も食べられんから」

「先生——」

と、芳子は泣出した。

時雄も胸を衝いた。師としての温情と責任とを尽した

かと烈しく反省した。かれも泣きたいほど侘わびしくなった。光線の暗い一室、行李や書籍の散逸せる中に、恋せる女の帰国の涙、これを慰むる言葉も無かった。

午後三時、車が三台来た。玄関に出した行李、支那鞆、信玄袋を車夫は運んで車に乗せた。芳子は栗梅くりうめの被布ひふを着て、白いリボンを髪に※「#「挿」のつくりの縦棒が下に突き抜ける、第4水準 2-13-28」さして、眼を泣腫なきはらしていた。送って出た細君の手を堅く握って、

「奥さん、左様なら……私、またきつと来てよ、きつと来てよ、来ないでおきはしないわ」

「本当にね、又出ていらっしやいよ。一年位したら、きつとね」

と、細君も堅く手を握りかえした。その眼には涙が溢あふれた。女心の弱く、同情の念はその小さい胸みなぎに漲り渡ったのである。

冬の日のやや薄寒き牛込の屋敷町、最先まっさきに父親、次に芳子、次に時雄という順序で車は走り出した。細君と下婢なごりとは名残を惜んでその車の後影を見送っていた。その後隣にわの細君がこの俄かの出立を何事かと思つて見えた。猶その後の小路の曲り角に、茶色の帽子を被かぶった男が立っていた。芳子は二度、三度まで振返った。

車が麴町こうじまちの通を日比谷へ向う時、時雄の胸に、今の女学生ということが浮んだ。前に行く車上の芳子、高い二百三高地巻、白いリボン、やや猫背勝なる姿、こういう形をして、こういう事情の下に、荷物と共に父に伴たれられて帰国する女学生はさぞ多いことであろう。芳子、あの意志の強い芳子でさえこうした運命を得た。教育家の喧やかましく女子問題を言うのも無理はない。時雄は父親の苦

痛と芳子の涙とその身の荒涼たる生活とを思った。路行く人の中にはこの荷物を満載して、父親と中年の男子に保護されて行く花の如き女学生を意味ありげに見送るものもあった。

京橋の旅館に着いて、荷物を纏め、会計を済ました。この家は三年前、芳子が始めて父に伴れられて出京した時泊った旅館で、時雄は此処に二人を訪問したことがあった。三人はその時と今とを胸に比較して感慨多端であったが、しかも互に避けて面おもてにあらわさなかった。五時には新橋の停車場に行つて、二等待合室に入った。

混雑また混雑、群衆また群衆、行く人送る人の心は皆空そらになつて、天井に響く物音が更に旅客の胸に反響した。悲哀と喜悦と好奇心とが停車場の到る処に巴渦うずを巻いていた。一刻毎に集り来る人の群、殊に六時の神戸急行は乗客が多く、二等室も時の間に肩摩けんま鞆ま撃こくげきの光景となつた。時雄は二階の壺屋つぼやからサンドウィッチを二箱買って芳子に渡した。切符と入場切符も買った。手荷物てにもののチッキも買った。今は時刻を待つばかりである。

この群集の中に、もしや田中の姿が見えはせぬかと三人皆思った。けれどその姿は見えなかつた。

ベルが鳴つた。群集はぞろぞろと改札口いしだに集つた。一刻も早く乗込もうとする心が燃えて、焦立いらだつて、その混雑は一通りでなかつた。三人はその間を辛かろうじて抜けて、広いプラットホームに出た。そして最も近い二等室に入った。

後からも続々と旅客が入つて来た。長い旅を寝て行くうとする商人もあつた。呉くれあたりに帰るらしい軍人の佐官さくわんもあつた。大阪言葉を露骨に、蝶々ちようちようと雑話に耽ふける女

連もあつた。父親は白い毛布を長く敷いて、傍に小さい靴を置いて、芳子と相並んで腰を掛けた。電気の光が車内に差渡つて、芳子の白い顔がまるで浮彫のように見える。父親は窓際に来て、幾度も厚意のほどを謝し、後に残ることに就いて、万事を囑しよくした。時雄は茶色の中折帽、七子の三紋ななこみつもんの羽織みでたちという扮装で、窓際に立尽していた。

発車の時間は刻々に迫つた。時雄は二人のこの旅を思い、芳子の将来のことを思った。その身と芳子とは尽きざる縁えにしがあるように思われる。妻が無ければ、無論自分は芳子を貰つたに相違ない。芳子もまた喜んで自分の妻になつたであらう。理想の生活、文学的の生活、堪え難き創作の煩悶はんもんをも慰めてくれるだろう。今の荒涼たる胸をも救つてくれる事が出来るだろう。「何故、もう少し早く生れなかつたでしょう、私も奥様時分に生れていれば面白かつたでしょうに……」と妻に言つた芳子の言葉を思い出した。この芳子を妻にするような運命は永久その身に來ぬであらうか。この父親を自分の舅しゅうとと呼ぶような時は來ぬだらうか。人生は長い、運命は奇くしき力を持っている。処女でないということが——一度節操を破つたということが、却かえつて年多く子供ある自分の妻たることを容易ならしむる条件となるかも知れぬ。運命、人生——曾かつて芳子に教えたツルゲネーフの「プニンとバブリン」が時雄の胸に上のぼつた。露西亞ロシアの卓すぐれた作家の描いた人生の意味が今更のように胸を撲うつた。

時雄の後に、一群の見送人が居た。その蔭に、柱の傍に、いつ来たか、一箇の古い中折帽を冠つた男が立っていた。芳子はこれを認めて胸を轟とどろかした。父親は不快な感を抱いた。けれど、空想に耽ふけつて立尽した時雄は、そ

の後にその男が居るのを夢にも知らなかった。

車掌は発車の笛を吹いた。

汽車は動き出した。

十一

さびしい生活、荒涼たる生活は再び時雄の家に音信れた。子供を持ってあまして喧しく叱る細君の声が耳について、不愉快な感を時雄に与えた。

生活は三年前の旧の轍にかえたのである。

五日目に、芳子から手紙が来た。いつもの人懐かしい言文一致でなく、礼儀正しい候文で、

「昨夜恙なく帰宅致し候儘御安心被下度、此の度はまことに御忙しき折柄種々御心配ばかり相懸け候うて申訳も無之、幾重にも御詫申上候、御前に御高恩をも謝し奉り、御詫も致し度候いしが、兎角は胸迫りて最後の会合すら辞み候心、お察し被下度候、新橋にての別離、硝子戸の前に立ち候毎に、茶色の帽子うつり候ようの心地致し、今猶まぎまぎと御姿見るのに候、山北辺より雪降り候うて、湛井よりの山道十五里、悲しきことのみ思い出で、かの一茶が『これがまアつひの住家か雪五尺』の名句痛切に身にしみ申候、父よりいづれ御礼の文奉り度存居候えども今日は町の市日にて手引き難く、乍失礼私より宜敷御礼申上候、まだまだ御目汚し度きこと沢山に有之候えども激しく胸騒ぎ致し候まま今日はこれにて筆擱き申候」と書いてあった。

時雄は雪の深い十五里の山道と雪に埋れた山中の田舎町とを思い遣った。別れた後そのままにして置いた二階

に上った。懐かしさ、恋しさの余り、微かに残ったその人の面影を偲ぼうと思ったのである。武蔵野の寒い風の盛に吹く日で、裏の古樹には潮の鳴るような音が凄じく聞えた。別れた日のように東の窓の雨戸を一枚明けると、光線は流るるように射し込んだ。机、本箱、罫、紅皿、依然として元のままで、恋しい人はいつもの様に学校に行っているのではないかと思われる。時雄は机の抽斗を明けてみた。古い油の染みたりボンがその中に捨ててあった。時雄はそれを取って匂いを嗅いだ。暫くして立上って襖を明けてみた。大きな柳行李が三箇細引で送るばかりに絡げてあって、その向うに、芳子が常に用いていた蒲団——萌黄唐草の敷蒲団と、線の厚く入った同じ模様の夜着とが重ねられてあった。時雄はそれを引出した。女のなつかしい油の匂いと汗のにおいと言いたいも知らず時雄の胸をときめかした。夜着の襟の天鵞絨の際立って汚れているのに顔を押し付けて、心のゆくばかりなつかしい女の匂いを嗅いだ。

性慾と悲哀と絶望とが忽ち時雄の胸を襲った。時雄はその蒲団を敷き、夜着をかけ、冷めたい汚れた天鵞絨の襟に顔を埋めて泣いた。

薄暗い一室、戸外には風が吹暴れていた。